



九州大学経済学部同窓会  
 事務局 〒819-0395  
 福岡市西区元岡744  
 九州大学経済学部内  
 TEL 092-802-5561 FAX 092-802-5560  
 mail: dosokai@econ.kyushu-u.ac.jp  
 郵便振替 01750-6-21743

**目次**

<b>令和3年度行事予定(総会のご案内) / 1</b>	<b>リレー随想</b>
<b>研究院長就任挨拶</b> 経済学研究院長 大石 桂一 / 2	コロナ禍に愚考を 尾木 信芳(昭和41年卒) / 19
<b>前研究院長退任挨拶</b> 経済学研究院教授 岩田 健治 / 3	武野先生の思い出 細江 守紀(昭和45年卒・昭和47年博士入) / 20
<b>事務局長就任挨拶</b> 同窓会事務局長 大坪 稔 / 5	武野ゼミ雑感 大住 圭介(昭和45年卒・昭和47年博士入) / 21
<b>前事務局長退任挨拶</b> 経済学研究院教授 藤井 美男 / 5	同窓生との縁を大切に 岡田 裕二(昭和53年卒) / 21
<b>支部だより</b>	篠栗町に生まれて 三浦 正(昭和54年卒) / 23
東京支部 事務局長 吉元 利行(昭和53年卒) / 6	ミャンマーで起業3年目です 竹之下 一也(平成24年卒) / 25
関西支部 理事 福本 翔悟(平成20年卒) / 7	Palookas 藤本 優臣(令和3年卒) / 27
明智光秀ゆかりの地を訪ねて～京都・丹波へ列車の旅～	
副支部長 中野 光男(昭和50年卒) / 8	
福岡支部	
福岡支部交流ゴルフ会、第68回コンペを開催!	
堀 芳郎(平成元年卒) / 10	
<b>自著を語る</b>	<b>人物往来 ～退任</b>
著作集第四巻下『公立大学論 平成の大学改革の現場実践録』	九州大学を退任するにあたって 磯谷 明德 / 29
九州大学名誉教授 矢田 俊文 / 11	九大での12年間を振り返って 平松 拓 / 31
『お酒の経済学-日本酒のグローバル化からサワーの躍進まで』	
一橋大学名誉教授・日本酒学研究会副会長 都留 康 / 16	<b>同窓会歴代会長 / 32</b>
	<b>同窓会からのお願い / 32</b>

**令和3年度行事予定(総会のご案内)**

令和3年度の各支部総会を下記の通り予定しております。皆様、お誘い合わせの上、多数ご参集下さいますようご案内申し上げます。コロナウイルスの影響で変更が余儀なくされることを懸念しております。

- |  |  |
|--|--|
| <p><b>令和3年度 関西支部総会</b><br/>                 コロナウイルス感染拡大のため、「中止」と決定しました。<br/>                 〈お問い合わせ先〉 関西支部事務局 谷村 信彦<br/>                 公益財団法人 大阪観光局<br/>                 TEL(06)6282-5908<br/>                 E-mail tanimura-n@octb.jp</p>  | <p><b>令和3年度 全国・東京支部合同総会</b><br/>                 日時 令和3年7月7日(水) 18時30分～<br/>                 場所 オンライン開催(同封の案内チラシのQRコードを読み取って参加登録ください)<br/>                 チラシが入っていない方は、下記まで。<br/>                 〈お問い合わせ先〉 東京支部事務局 吉元 利行<br/>                 TEL (090) 8877-9012<br/>                 E-mail t29yoshimoto@aol.com</p> |
| <p><b>令和3年度 福岡支部総会</b><br/>                 日時 令和3年6月8日(火) 18時～ 開催予定<br/>                 場所 西鉄グランドホテル<br/>                 (福岡市中央区大名2-6-60 TEL(092)771-7171)<br/>                 〈お問い合わせ先〉 福岡支部事務局 国生、高木<br/>                 公益財団法人九州経済調査協会内 TEL(092)721-4900<br/>                 E-mail soumu-02@kerc.or.jp</p> | <p><b>令和3年度 広島地区九大法・経同窓会総会</b><br/>                 日時 令和3年11月 開催予定<br/>                 場所 未定</p>   |

新型コロナウイルス感染拡大防止の為、変更・中止の可能性があります。出席希望の方はホームページでのご確認をお願いします。

## 研究院長就任挨拶



経済学研究院長  
大石 桂一氏  
1990(平成2)年卒  
1993(平成5)博士入

このたび、岩田健治研究院長の後を引き継ぎ、2021年4月から2023年3月までの2年間、経済学研究院長（経済学部長、経済学府長）を務めることになりました。私は平成2（1990）年卒で、学部時代は徳賀芳弘先生のゼミに所属し、大学院では津守常弘先生と徳賀先生にご指導をいただきました。

2021年4月からの新しい部局執行部のメンバーは、内田交誼教授（副研究院長）、浦川邦夫教授（経済工学部門長、経済工学専攻長、経済工学科長）、丸田起大教授（産業・企業部門長、経済システム専攻長、経済・経営学科長）、高田仁教授（産業マネジメント部門長、産業マネジメント専攻長）、加河茂美教授（国際経済経営部門長）、および大石の6名です。岩田研究院長およびその前の磯谷明德研究院長の執行部は数多くの課題に取り組みましたが、新執行部もその路線を踏襲し、一丸となって経済学研究院の発展に尽力していく所存ですので、同窓会の皆様におかれましても、お力添えを賜りますようお願い申し上げます。

昨年度は新型コロナウイルスに翻弄された1年でした。経済学研究院は、コロナ禍にあっても教育の質を維持すべく、八木信一教授をヘッドとする「オンライン化特設チーム」を設置し、岩田研究院長の陣頭指揮のもと、迅速に対応して参りました。その結果、学生アンケートでも高い評価を得ており、他大学や九大の他学部と比べても質の高いオンライン授業を提供できているものと自負しております。コロナウイルスの完全収束が見通せない中、今年度も当面はオンラインと対面のハイブリッド授業を継続しつつ、さらに教育の質を高めて参ります。ただ、対面接触の機会が大幅に減少したことから、心身に不調をきたす学生も少なくありません。そのような学生へのケアも怠ることなく、学生委員会を中心に細心の注意をもって対応していきたいと思っております。

ここ数年、教育のグローバル化は最重要課題の一

つでした。そうした中、2018年4月に「経済学部グローバル・ディプロマ・プログラム（通称GProE）」をスタートさせました。2年次進級時に10名を選抜し、短期語学留学・長期交換留学・外国語での卒業論文などを課すことでグローバル人材の育成を目指すこのプログラムは、オーストラリアのクイーンズランド大学（2021年度はモナシュ大学）や中国人民大学の協力を得て、コロナ禍にあってもオンライン留学などを駆使して、今年度、第1期生を最初のプログラム修了生として世界に送り出すことができる見込みです。また、大学院（学府）については、2017年10月に、既存の経済工学専攻「経済学国際コース」を基礎として、経済システム専攻および産業マネジメント専攻の協力のもと、（1）公共経済学国際プログラム（IPPE）、（2）金融・企業経済学国際プログラム（IPFBE）、および（3）経営・会計学国際プログラム（IPMA）という3つのプログラムを設置しました。すべて英語による授業・論文指導で学位を取得するこれらのプログラムは、すでに十分定着し、世界各地から集まった優秀な大学院生にグローバル・スタンダードの教育を提供し続けております。

こうした教育のグローバル化に加えて、学際化もいっそう進めて参ります。2018年4月に始動した「文系4学部副専攻プログラム」を通じて、学生が経済学を深く学びつつ、文系他学部の授業を副専攻として体系的に学ぶことで、専門性と幅広い知識・教養とを兼ね備えた人材を育成いたします。文系4学部の中でも経済学部の学生は、このプログラムに最も積極的に参加しています。そのような意欲の高い学生を学部として引き続き支援するとともに、プログラムのさらなる拡充を目指します。

2021年度からは、数学博士人材を育成する、九州大学の5年間の修士博士一貫プログラムである「マス・フォア・イノベーション卓越大学院プログラム」がスタートします。このプログラムには、数理学府の大学院生などに混じって経済工学専攻の大学院生も選抜を経て参加し、経済工学部門の瀧本太郎教授を中心に、経済学研究院の教員も重要な役割を果たします。さらに、産業マネジメント部門の永田晃也教授がセンター長を務める「科学技術イノベーション政策教育研究センター（CSTIPS）」が実施する「科

学技術イノベーション政策人材開発トラック」でも、経済学研究院は責任部局として中心的な役割を果たして参ります。

これらの教育面での改革は、2015年に巻き起こった「人文社会科学分野等の再編」の議論を契機としているものも少なくありませんが、あくまでも社会の要請に応えるために経済学研究院および九州大学が主体的に取り組んできた結果であります。その過程で、同窓会の皆様には大変お世話になり、貴重なご助言、ご支援を賜りました。私自身も当時、専攻長・学科長として学外有識者との意見交換に何度も参加させていただきました。心より御礼申し上げるとともに、これらの改革をさらに推進し、発展させることで、その御恩に報いる所存です。

大学のもう一つの重要な使命である研究についても、さらなる飛躍を遂げるべく、部局をあげて教員の研究活動を支援して参ります。経済学研究院には

国内外で高い評価を得ている教員が多いにもかかわらず、その研究水準に比して発信力が弱いということが、しばしば指摘されておりました。そうした優れた研究業績は経済学部・学府のホームページなどで積極的に発信していくと同時に、岩田研究院長のご判断で2020年度に部局特別予算として計上した「研究力強化のための予算」を今後できるだけ拡充し、国際的に評価される研究および社会にインパクトを与える研究の遂行を支援したいと考えております。また、引き続き「人社系協働研究・教育コモンズ」を通じて、経済学の枠内にとどまらない学際的な研究も推進いたします。

経済学部・学府・研究院が今後ますます発展し、有為な人材を世に輩出し続けるためには、同窓会の皆様のご支援が不可欠です。どうか、次代を担う後輩たちのために、よりいっそうのご支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

## 前研究院長退任挨拶



経済学研究院教授

岩田 健治氏

2021年3月末をもって、経済学研究院長・学府長・学部長を退任致しました。

2年間という比較的短い期間でしたが、同窓会の

皆様から頂戴した様々なご支援・ご鞭撻に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。再任で4年間お勤めになった磯谷明徳・前研究院長の後を継いで、2019年4月に就任した際には、①学部教育の学際化、②教育のグローバル化、③研究面での人社系4部局の連携という三つの目標を掲げ、前研究院長が敷かれたレールの上を順調に滑り出すことができました(同窓会報・第68号参照)。また、福岡、東京、大阪、広島等では、熱気あふれる同窓会に参加する機会を得て、各界で要職に就きながら経済学部を愛し、支え、そして叱咤激励下さる皆様と交流できたことは、本当に素晴らしい経験となりました。

ところが2020年が明けると、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の拡大により状況は一変致しました。当部局では、①部局内で感染者を出さない、②教育サービスの質を低下させない、という二つの目標を

掲げ、教職員一同が智恵を絞りながら難局に挑戦して参りました。

このうち①の目標は、全学のサークル活動やそれに伴う合宿・飲食などへの参加という形で8月以降、経済学部生にも若干名の陽性者が出ましたが、重症化はせず、その後の部局内での感染やクラスター形成も何とか食い止めております。

②については、2020年4月1日に八木信一教授をチーム長とする「オンライン化特設チーム」を組成。授業提供のためのオンラインツールとしてZoomを選択し、予算措置と教員研修の上、5月よりオンライン授業を開始しました。感染症がなければ3年かかっただであろう教育のICT実装を1か月で実現したことになります。同チームが年度末に実施したアンケートによれば、Zoomによるオンライン授業は、学生から理解度で89.8%、満足度で76.4%という高い支持を得ており、②の目標についても概ね達成できたものと考えます。

国際交流施策についても、留学生・国際交流・GProE(経済学部グローバル・ディプロマプログラム)の各委員会・委員長のご尽力で、オンラインで授業が継続されているものについてはイン・アウトともに公式授業と認め、現地に行くことができなくても単位や学位がとれる体制を整えました。当部局も含め世界の大学は、もはや時差だけを気にすれば

よいグローバルな「仮想留学システム」を手につ  
つあります（もちろん現地に行って生活しながら学  
ぶことの重要性に変わりはありませんが）。入試に  
関しては、30年続いた「センター試験」の「共通テ  
スト」への移行、経済・経営学科による「総合型選  
抜Ⅱ（IHAO入試）」の導入など、大規模な入試改  
革の年をCOVID-19が襲った形となりましたが、大  
西俊郎副研究院長の陣頭指揮のもと、ミスもなく例  
年同様に優秀な学生・院生を選抜できたことに安堵  
しております。

かくして、任期後半の1年間は、経済学研究院の  
教職員・学生にとって歴史に残る特別な時間の連続  
となりましたが、創造力に富み、公共心溢れる素晴  
らしい部局執行部・教職員の皆様と力を合わせて難  
局を乗り越え、教育研究へのICT実装など先を見据  
えた仕事ことができましたことを、とても嬉しく思っ  
ております。

現在九州大学は、当部局が最前線で進めてきた教  
育研究のグローバル化や学際展開に加え、イノベー  
ションの拠点としての発展が求められております。

本学府・経済工学専攻では、瀧本太郎教授を中心と  
するチームが数理系の部局・センターと協働で「マ  
ス・フォア・イノベーション卓越大学院」プログラ  
ムに採択され、数学モデリング人材の育成をこの4  
月より開始しております。また永田晃也教授を中心  
に、科学技術イノベーション政策を担う「STI政  
策人材開発トラック」構築に向けた準備も順調に進  
んでおります。

新しく研究院長に就任された大石桂一教授は、会  
計研究の第一線で活躍され、教育や国際交流でも多  
くの実績があります。内田交謹副研究院長とともに、  
大学や部局が直面する上述の諸課題に積極果敢に挑  
戦していくことができる、若くて最強の執行部と確  
信いたしております。

同窓会の皆様におかれましても、コロナ禍で、さ  
まざまなご苦勞をされているものと拝察いたすところ  
ですが、2024年の創設100周年に向け挑戦を続け  
る経済学部・学府・研究院へのご支援・ご鞭撻を引き  
続き賜れましたら望外の喜びです。

2年間、まことにありがとうございました。

## 令和3（2021）年度入学式 新入生315名 令和2（2020）年度卒業式 卒業生313名

3月24日（水）に、西鉄グランドホテルで開催を  
予定しておりました経済学部卒業生・経済学府修了  
生の卒業記念祝賀会は、新型コロナウイルス感染拡  
大への懸念から、やむなく中止となりました。

経済学部卒業生は238名で、うち経済・経営学科  
146名、経済工学科92名でした。経済学府修士課程  
修了生は75名で、うち経済工学専攻13名、経済シ  
ステム専攻21名、産業マネジメント専攻41名です。若  
手研究者への研究支援や学業優秀な学生への顕彰と  
して贈られる「南信子」教育研究基金による「南信  
子」賞の授与が、以下の通り行われました。

### 修士論文・プロジェクト論文

- |                |                |
|----------------|----------------|
| (1) 経済工学専攻     | 山野 真拓          |
| (2) 経済システム専攻   | 丁 芸<br>前野 啓太郎  |
| (3) 産業マネジメント専攻 | 渡邊 由佳<br>坂巻 将之 |

### 成績優秀者

- |             |                 |
|-------------|-----------------|
| (1) 経済・経営学科 | 古川 拓馬<br>井上 まどか |
| (2) 経済工学科   | 九鬼 夕菜           |

昨年度も各支部の皆様方を始め大勢の方々の御協  
力を仰ぎ、一年間の活動と行事を終えることができ  
ました。関係の皆様方には心より御礼申し上げます。  
ただ、最後の行事である卒業記念祝賀会が中止と  
なったのは大変残念なことでした。各支部におかれ  
ましては、新卒者を例年に増して厚く迎えていただ  
きますようお願い申し上げます。新型肺炎が早く終  
息し、平穏な日常が戻ることを祈りたいと思います。

当同窓会は、財政問題を抱えつつ運営しておりま  
す。その中で貫正義会長を先頭に、同窓会活動が充  
実したものとなるよう考えて参りますので、各支部  
同窓会役員の方々ならびに同窓生の皆様方へ、一層  
の御協力と御支援をお願い申し上げ、新年度の御挨拶  
といたします。

## ◆新事務局長就任挨拶



同窓会事務局長

**大坪 稔**氏

1995(平成7)年卒

1997(平成9)博士入

このたび、藤井美男先生より事務局長の仕事を引き継ぐことになりました大坪です。はじめに、8年もの長きにわたり事務局長として御尽力いただきました藤井先生には心から感謝し、この間のご苦勞をねぎらいたいと思います。任期中には、同窓会の財政問題や新型コロナへの対応など様々なご苦勞があったことと思います。重ね重ね、お礼申し上げます。

さて、簡単ではございますが、自己紹介をさせていただきます。私の専門は経営財務で、経済・経営学科で経営関係の講義を担当しています。九州大学経済学部には、学部から始まり修士・博士課程までお世話になりました。今年の3月まで経済・経営学科長をしており、やっと任期が終わりほっとしていたところ、藤井先生より事務局長の引継ぎの依頼を受けました。わたしに、このような大役が務まるのか不安ではございましたが、これまで九州大学経済学部には長きにわたりお世話になったこともあり、引き受けさせていただきました。同窓会の活動に関係する方々にはご迷惑をおかけすることもあるかと思いますが、どうぞよろしくお願ひします。

みなさまもご存知のように、昨年度は新型コロナの対応に追われた一年でした。九州大学でも、入学式や卒業式などの様々な行事、入学試験などでこれまでと異なる対応を迫られ、皆が大変な一年でした。毎年行われていた同窓会主催の卒業祝賀パーティについても残念ながら昨年度は中止となり、多くの卒業生がさみしかったことと思います。私自身も、昨年度は4月から急遽オンラインでの講義に変更し、毎週慣れない作業に追われていました。また、ゼミについては毎年4月に毎年実施していた新歓合宿を中止にしたのを始めとして、その後一年間は合宿や懇親会を開催できませんでした。

その中でも、新型コロナの影響を最も受けたのは1年生だったことでしょう。毎年のことですが、新入学生は希望と期待に胸を膨らませて入学し、友人や先輩、教員などとの新たな出会いを楽しみにしていたはずですが。しかしながら、昨年度はほとんどの講義がオンラインで行わざるを得なかったため、な

かなか新たな出会いや人間関係を築くことが難しかったかもしれません。事実、わたしが担当した1年生向けのゼミ(プレセミナー)の学生からは、「新たな友達はまだ一人もできていない」「部活やサークルの入り方やタイミングが分からない」などの意見も聞かれました。私自身、今回の新型コロナを期に、大学は学生に「なにを提供すべきか」について深く考えさせられたように思います。

もっとも、新型コロナを機に、会議をオンラインで実施することによる利便性の向上や時間の節約、学生が繰り返し利用可能な教材の作成などを通じた新たな教育方法の開発・提供など、プラスの面があったことも事実です。

最後になりますが、卒業生同士はもちろんのこと、在學生と卒業生との人間関係の構築の場として同窓会が益々存在感を示すことができるよう微力ながら頑張る所存でございます。つきましては、皆様のご協力を切に願ひすることをもちまして、事務局長就任の挨拶とさせていただきます。

## ◆前事務局長退任挨拶



経済学研究院教授

**藤井 美男**氏

1980(昭和55)年卒

1983(昭和58)年博士入

前任の久野国夫教授から平成25年4月に事務局長の任を引き継いで、8年間本部事務局長を務めました。私も大学の定年退職まで1年となりましたので、今年3月をもって退任し、大坪稔教授に後を託すことにいたしました。

就任当初は池田弘一前会長、その後貫正義現会長のもと、全国理事会の皆様や同窓生の方々に支えられながら、何とか同窓会運営を続けて参りました。皆様には心より感謝申し上げます。

この間運営は順風満帆でしたと述べたいところですが、実際は心残りの点が少なからずあることは残念に思う次第です。久野前事務局長の時に東日本大震災が発生し、急遽卒業祝賀会が中止となったことは記憶に新しいところですが、新型コロナウィルスの蔓延による緊急事態宣言を受けて、昨年度と本年度と2年続けて卒業祝賀会を中止とせざるを得なかったことは、同窓会と在學生が直接触れ合うことのできる最大の恒例行事でもあり、また、卒業生諸君の心境を<sup>ざんき</sup>考えても、慙愧に耐えないことでした。

また、4月から順次行われるはずの、支部総会や全国理事会、全国総会も一部オンラインの場合を除いて、ほとんど中止となったこともこれに加えてはならないでしょう。来年度こそは、例年通り年中行事を開催できるよう切に願っているところです。

もう一つ心残りの懸念は、本同窓会の財政問題です。私の就任当初さほど大きな財政悪化の状況ではありませんでしたが、次第に単年度収支の均衡を図ることができず、毎年のように基金を取り崩す状態となってしまいました。その最も大きな要因は、在学生会員による会費未納者の増加（卒業後も未納のまま）にあります。会費徴収率を上げるべく、この間様々な手立てを講じてきましたが、著効を見るに至っておりません。むしろ、このコロナ禍で生活費

に困窮する在学生も少なからず存在すると想定され、事態の好転を望むのが一層困難となっております。本稿執筆時点で、ワクチン接種が開始されるという状況となって参りましたので、コロナ禍終息後にはまた新たな対策を考える必要があろうかと思えます。この文章を読まれている会費未納の会員の皆様には、事情を御賢察頂き、ぜひ納入して下さいますようお願い申し上げます。詳細は本部事務室へ遠慮なくお問い合わせください。

これからは私も一同窓生として、同窓会活動に参加し、微力を尽くしてゆくつもりであります。8年にわたり未熟な私を御支援御鞭撻下さった方々皆様に改めて御礼申し上げ、事務局長退任の挨拶とさせて頂きます。

## 支部だより

### 東京支部

#### 1. 理事会

東京支部理事会は、2月18日（木）18時30分からZoomにてオンライン開催とし、支部長、副支部長以下合計18名の理事の参加者で開催しました。理事会では、「2021年の新卒歓迎会の開催について」「2021年度七夕総会の開催について」協議を行いました。

その結果、新型コロナウイルス感染の終息が見通せないことから、いずれもZoomを使ったオンライン開催とすることとし、必要な準備を若手理事で行うこととしました。不慣れな中で実施した昨年の経験を踏まえ、集合開催にはない、特徴を生かした新卒歓迎会と総会にしたいと考え、企画を検討中です。

なお、新卒歓迎会は、今年も集合研修ではなく、オンラインでの研修が多く見込まれることから、適切な日程設定が難しいと考えます。そこで、4月10日（土曜日）と5月15日（土曜日）の各午後7時から2回実施することとしました。

新卒歓迎会と7月の総会は、この会報に同封したチラシにあるQRコードをそれぞれ読み取っていただき、参加登録をお願いします。

#### 2. 実施したイベントについて

東京支部では、昨年の7月の七夕総会の中止後も、12月の九大東京現役OBOGも中止となり、特に支部としてのイベントを実施できませんでした。

しかし、今年1月23日には、九大総務部就職支援課と九大東京同窓会就活支援チームの合同により実施された、Zoom就活セミナーに協力しました。

今までの就活セミナーは、九大東京同窓会就活支援チームリーダーとOBOGが伊都キャンパスを訪問し、全学部学生を対象に企業内容や業務内容などを紹介して、就職活動の参考としてもらう意図で毎年開催されてきました。しかし、今年は、非常事態宣言の下、東京と福岡の交流が難しく、Zoomを利用したオンライン開催となりました。

セミナーでは、最初に6人のOBOGの会社と業務紹介、就職にあたっての就職先の選定に役立つ情報の提供が行われました。また、今年は、オンライン開催の特徴を生かし、ブラジル、上海、香港に駐在する3人のOBOGから、海外赴任と業務や生活に関する貴重な情報提供もありました。

このほかにも参加したOBOGを交えて4グループで実施したブレークアウトセッションでは、仕事や会社生活などに対する活発な質問があり、4時間を超え



学生会館を事務局に運営しました

る充実したセミナーとなりました。なお、三年生の参加登録者50数名のうち、経済学部生は20人を超えました。

また運営側も、司会者として瀬藤君、説明者として、上妻さん（香港）、長澤さん（商船三井）、平山君（明治）、左君（博報堂）と多くの経済学部卒業生が主要な部門を担当しました。ご協力ありがとうございました。

【東京支部事務局長 吉元 利行 昭和53年卒】

## 関西支部

### 秋の見学会（令和2年11月14日実施）報告

関西支部は、年に一度見学会を実施しています。今回は、秋の紅葉見学会に京都の嵯峨嵐山や大河ドラマ「麒麟が来る」で話題の明智光秀ゆかりの地である亀岡をめぐる見学会を実施しました。新型コロナウイルス感染症拡大の影響のため出席者の



丹波亀山城の石垣の前にて

数も心配でしたが17名の参加があり、全員マスクを装着してツアー中も密を避けるなどしっかり感染防止対策をして開催しました。今回は話題のGO TO トラベルキャンペーンを活用したツアーであり、参加者はJR大阪駅に集合しJR京都駅経由でJR嵯峨嵐山駅に移動して散策をスタートしました。

JR嵯峨嵐山駅に到着後、トロッコ嵯峨駅に移動して、まずはトロッコ列車に乗りました。当日は紅葉のシーズンと、天候にも恵まれて絶好の観光日和となったため、トロッコ列車も満席でした。トロッコ列車は窓が無いので、案外感染防止対策は出来て



懇親会・支部長の乾杯

いると思いましたが、トンネルに入ると時節柄さすがに少し寒く感じました。それでも、トン

ネルを抜けて、無い窓から見える保津川渓谷は、色付き始めではありましたが、時折風が吹いて舞った落葉が日差しに輝いて、とても綺麗でした。



保津川下りの船上から

トロッコ列車は20分程でトロッコ亀岡駅に到着し、そこからJR馬堀駅で乗り換えJR亀岡駅に移動して、次は亀岡散策です。亀岡は、明治期に改称されるまで亀山という地名であり、古くから京都西北の入口として栄え、源氏ゆかりの地でもあり、源氏の支流といわれる明智光秀が城下町を作ったことでも有名です。私たちはガイドに従って丹波亀山城址を周りました。この丹波亀山城は、近隣には珍しい城下町を含む広大な総構えという作りであり、築城した明智光秀の時代から、江戸時代を通じて要地として発展したことがうかがえます。また、城址には光秀が植えたといわれる大イチョウの木が今も残っており、そこから見える城下町も相まって光秀のことが偲ばれる光景でした。（注1）

散策が終わり、お楽しみの懇親会は、歴史的な建築物としても有名な「がんこ亀岡楽々荘」です。小森田支部長の挨拶に始まり、美味しい料理とたくさんのお酒をいただきました。心地よくなった頃、本日ご参加の最年長の宍戸先輩（昭和36年卒）の締めくくりに懇親会を終了しました。終了後、国の登録有形文化財でもある玄関で集合写真を撮りました。

ツアーの締めくくりは保津川下りです。当日はトロッコ列車と同じく満員の中、水量が少なめで緩やかだったため2時間近いコースです。緩やかといっても、急流の部分はスリル満点で、船の端に座ると水しぶきでしっかり濡れました。また、途中、船頭さんから、この保津川下りが古くは水運の手段とし



がんこ亀岡楽々荘の玄関にて

て戦後まで利用されており、当時は船を上流まで何時間もかけて引っ張り上げていたという話を聞きました。そんな今では考えられない苦労話にも思いを馳せながら、保津川溪谷を進み、河原の奇岩や赤く色付き始めた山々を見て、秋の季節を存分に満喫しました。(注2)

今回も皆様のご協力のお蔭で、楽しい一時を過ごすことが出来ました。

ありがとうございました。

(注1) 丹波亀山城は、1577年頃、織田信長の命を受けた明智光秀が、丹波攻略の拠点として築城した。しかし、三百年余り続いた丹波亀山城も明治初頭の廃城令を受け、天守はもとより、全てが払い下げられ、所有者が転々としたが、1919年、亀岡出身の宗教法人大本の教祖・出口王仁三郎が荒れ果てた城址を買い取り、現在に至る。大本によって石垣などが修復され、総合受付で申し込むと見学することが可能である。(亀岡市観光協会のパンフレットなどより抜粋)

(注2) 保津川下りは、1606年、角倉了以が木材・薪炭などの丹波地方の産物を京へ送るために産業水路として拓いたものである。(パンフレットより)

【関西支部理事 福本 翔悟 平成20年卒】

.....

### 明智光秀ゆかりの地を訪ねて

#### ～京都・丹波へ列車の旅～

関西支部副支部長

**中野 光男氏**

1975(昭和50)年卒

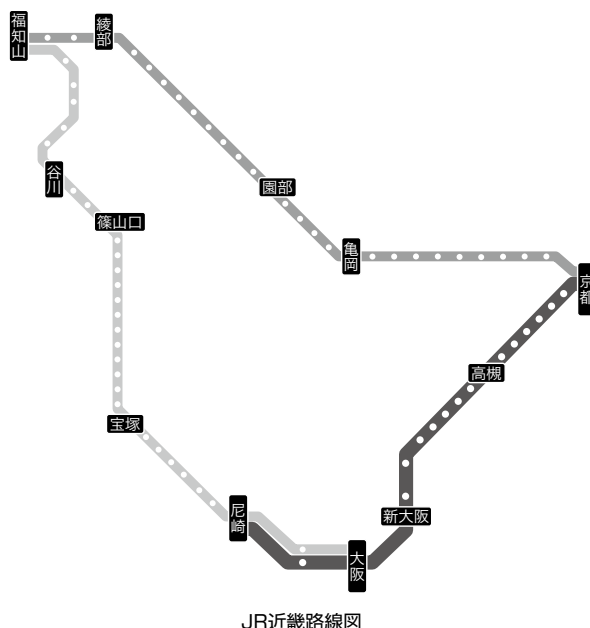
新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、不要不急の外出自粛要請が出て以来、早いもので1年が経過しようとしています。こういう非常時に、関西の観光スポットを宣伝するのも、不謹慎のそしりを免れませんが、NHK大河ドラマ「麒麟がくる」の主人公・明智光秀のゆかりの地が話題になっていたので、その一部をご紹介します。

#### まずは、丹波亀山城(亀岡市)。

関西支部の見学会の報告にもありましたが、昨年11月に総勢17名が、京都駅から嵯峨野線に乗ってJR嵯峨嵐山駅→トロッコ嵯峨駅→トロッコ亀岡駅→JR馬堀駅→JR亀岡駅と約1時間半かけて移動し、



亀山城入場券



JR近畿路線図

そこで丹波亀山城(以下、「亀山城」という)を中心にガイド付きで散策しました。ちなみに、京都駅から亀岡駅まで山陰本線の快速に乗れば約20分で移動できます。

亀岡市は、京都府の中西部(旧丹波国の最南端)に位置し、旧山城国・旧摂津国の境目となる。人口は約8万6千人で京都市、宇治市に次いで京都府第3位である。旧丹波国の中で最多であり、旧丹波国内の中心都市であった。戦国時代末期に明智光秀が亀山城と城下町を築いたことが近代亀岡の礎となった。もともと亀山と言われていたのが、明治2年、三重県の亀山市と混同するため、亀山から亀岡に改称された。(以上、ウイキペディアより)

天正3年(1575年)織田信長から丹波侵攻を命じられた明智光秀は、丹波攻略の拠点にするために、保津川と沼地を北に臨む小高い丘(荒塚山)に亀山城を築城した。この城は政務の場として機能させた平山城である。天正8年に丹波国を拝領して、本格的な城下町の整備と領国経営に着手するが、その2年後に「本能寺の変」が起こる。

亀山城はその後、小早川秀秋により修築され、慶長15年(1610年)岡部長盛の代に幕府が命じた天下普請により近世城郭として完成する。しかし、明治維新以降は廃城処分となり、所有者が転々として、紆余曲折の末、荒れ果てた城跡を宗教法人大本が入手し現在に至る。当初の築城時「五重の層塔型天守」が造営されたが、残念ながら現存しない。ただ石垣は大本によって修復されて今もそのまま残っている。なお、宗教法人大本の本部は発祥の地の綾部にあるが、ここ亀岡(丹波亀山城址内)にもある。ま



た、明智光秀は、人心を掌握し国人衆や旧幕臣衆を家臣としてうまく任用するなど、領民たちに慕われた善政の知将として、現在でもその遺徳がしのばれていて、「亀岡光秀まつり」が春の一大市民祭りとして昭和48年から毎年続けられている。(以上、亀岡市観光協会パンフレットなどより)



明智光秀公像

### つぎは、福知山城（福知山市）。

昨年9月下旬、前の勤務先による丹波市（兵庫県）での栗拾いのイベントに参加し、そこから車で約30分位走ったところに隣の福知山市（京都府）があり、せっかくなので明智光秀が築城した「福知山城」を見に行ってきました。なお、福知山市の玄関口、福知山駅までは、大阪駅から特急で約1時間45分、京都駅から特急で約1時間30分、いずれも乗り換えなしで行けます。

天正7年（1579年）頃、丹波を平定した際に西国攻略の拠点として、由良川に対して伸びる丘陵を中心



福知山城にて

に築城された平山城で、城郭及び城下町周辺を堀で囲んだ「惣構え」の城です。光秀は築城後、娘婿の明智秀満（左馬之助）を城代として入れ、この地の統治を任せました。「本能寺の変」後の「山崎合戦」などで滅

亡後、福知山城は羽柴秀長をはじめとした城主を迎え、改修と増築が進められ、江戸時代（有馬豊氏が城主のとき）に完成した。江戸時代以降、転封や改易により城主が頻りに代わったが、朽木植昌（たねまさ）が城主になってから明治維新まで朽木家13代約200年続いた。

明治6年（1873年）の廃城令により天守周辺の石垣や銅門を残し、福知山城はその大半が失われたが、昭和61年（1986年）、市民の「瓦一枚運動」により天守閣などが再建整備され、現在の城となっている。

また、石垣も築城時に使われた転用石（信長の敵対勢力として破壊せざるを得なかった寺院の五輪塔など）がそのまま残っている。明智光秀は、短い統治期間の中で、築城と合わせて地子銭（土地税・住宅税に相当）の免除や河川の氾濫を防ぐために由良川の流れを大きく北に付け替えるという大規模な治水工事などの善政を行い、現在の福知山の礎を築いたと伝えられる。その善政を語り継いだ領民たちが光秀を御霊（ごりょう）神社に祀り、「福知山御霊大祭」が開催されている。(以上、「ちょこっと関西 歴史たび」(西日本旅客鉄道主催)や福知山城のパンフレットなどより)。余談ですが、御霊神社のすぐ近くに鴨肉と葱だけを使った「鴨すき」で有名な「鳥名子（とりなご）」があります。

### そして、綾部市。

昨年9月中旬、綾部市の山崎善也市長（昭和55年九大経済学部卒）からお誘いがあり、市制施行70周年の綾部市の発展ぶりを見てまいりました。山崎市長は平成22年に市長就任以来、地域の活性化に取り組んでいます。(詳しくは、蒲田正樹著「驚きの地方創生～京都あやべスタイル～」参照)。参加者は私のほか、経済学部の北野嘉文氏（昭和57年卒）と谷村信彦氏（平成3年卒）および法学部の岡政徳氏（昭和44年卒）の合計4人。いずれも九大関西同窓会の幹事の皆さん。住まいが別々なので綾部駅前に現地集合しましたが、京都駅から山陰本線の特急で約1時間、大阪駅からは福知山線の特急利用で約1時間50分。ちなみに私は、行きはJR宝塚駅から福知山線の特急を利用、福知山駅で乗り換えて綾部駅まで約1時間半、帰りは山陰本線の特急利用で京都駅まで、そこから東海道本線の新快速利用、尼崎駅で乗り換えて川西池田駅まで約2時間かかりました。

当日は、綾部市長自らが出迎え、車に同乗したうえで市内を案内していただきました。最初に綾部市



綾部市長（右から二番目）と紫水ヶ丘公園にて

の市街地が一望できる「紫水ヶ丘公園」へ。全体の地形を頭に入れて、いよいよ市街地へ。綾部市は古くから養蚕が盛んで繊維業を中心に発展してきましたが、綾部発祥で現在も本社が綾部にある東証1部上場企業、ゲンゼ(株)のゲンゼ記念館(旧本社)およびゲンゼ博物苑を見学。ゲンゼ創業者の波多野鶴吉の生涯と功績の紹介、蚕から生糸にするまでの工程や機械器具、そして最終製品の見本などが展示されており、大変勉強になりました。次に、大本(出口なおが明治25年に開教、「万教同根」を根幹とする宗教で本部が綾部と亀岡にある)の20世紀最大級の木造建築「長生殿」や国の登録有形文化財である「みろく殿」を見学したり、梅松苑を散策したりしました。夕方は由良川のほとりにある料理旅館「現長」で、鮎などの地元料理を味わいました。冬は丹波の猪肉を薄く切って皿に盛り付けた「ぼたん鍋」が有名です。

ところで、綾部には明智光秀と言っても、亀岡や福知山のように拠点があったわけではありません。

「丹波(綾部市、福知山市、亀岡市、丹南市、京丹波町、京都市右京区京北町、丹波篠山市、丹波市)を平定した明智光秀は、所領においては善政を行い、領民から慕われた名君ともいわれるが、平定も立場を変えれば侵略ともいえ、光秀に壊された、焼き討ちにされたという場所や伝説が綾部には残っており、様々な視点で歴史を学べる」(「あやべ大好きBOOK」より)とあります。

以上、時期もバラバラでそれぞれワンポイントで行ってきた感じですが、実はJRの大阪駅・新大阪駅でも京都駅でもどこかを起点にして一周するのがおすすめです。運行距離は約250kmなので切符の有効期間は3日、途中下車も可能なので1枚の切符で回れます。亀岡や福知山、綾部と言わず、京都でも園部でも、また篠山口(兵庫県丹波篠山市)などにも途中下車できます。新型コロナウイルス感染症が終息したあかつきには是非出かけてみてください。

## 福岡支部

福岡支部交流ゴルフ会、第68回コンペを開催！  
～11月15日(日)伊都ゴルフ倶楽部



堀公認会計士事務所 代表  
**堀 芳郎**氏  
1989(平成元)年卒

「第68回交流ゴルフ会」において優勝しました堀芳郎です。

現在、大濠公園の近くで監査法人及び公認会計士事務所の代表をいたしております。

今回も伊都ゴルフ倶楽部において56名の参加で開催されました。コロナ禍ということもあり表彰式はおこなわないスタイルで2日後に順位表がメールで送られてきましたが、メールを確認する前に数名からLINEで優勝のお祝いコメントをいただき、先に今回の優勝を知ることになりました。

当日、11月開催となったマスターズトーナメントの3日目を午前3時からテレビ観戦していたこともありショットとパットのイメージトレーニングは十分な状況でコンペに臨むことができました。スタート時の挨拶の際に、貫正義会長(S43年卒)から今

日は「10.5フィートのいつもより早めのグリーン」とのアドバイスもあり下りのラインには気を付けて3パットはしないように考えて気を付けてライン読みをおこないました。

前日に密かに今回、バスグロを取られた鎌田幸治さん(H21QBS卒/S62工卒)と練習ラウンドをおこない打倒・道永幸典先輩(S56年卒)を目標にお互いにバスグロを目指しました。(注：道永先輩が調子悪い時でこちらが最高に調子のいい時という前提条件が必要です)。

同組は橋本上先輩(S59年卒)、ゼミの後輩の田川真司君(H2年卒)、若手の田中拓郎君(H16年卒)で日頃より良く知っているメンバーであったこともあり、緊張感もなくラウンドができました。3番と10番のロングでOBを出しましたが、何とかボギーとダブルボギーで抑えることができ、それ以外も大きなショットのブレがなかったのが大きな勝因だったかと思います。

日頃より経済学部OBの先輩・後輩においてはプライベートのゴルフの交流だけでなく仕事でもいくつか関わりを持たせていただいております。

今回は表彰式もなく恒例の各自の1分間スピーチもなかったことで少し寂しい交流ゴルフ会ではありましたが、次回においては表彰式で集まれるようになりスピーチもできるようになれば幸いです。

# 自著を語る

## 著作集 第四巻下

『公立大学論(下) 平成の大学改革の現場実践録』



九州大学名誉教授  
北九州市立大学名誉教授  
**矢田 俊文氏**

本同窓会報68号では、『公立大学論(上) 平成の大学改革と公立大学』を紹介し、ここで、明治・大正・昭和初期の大学制度の構築、戦後の新制大学制度の導入に次ぐ1990年代から2010年代の政府主導の大学改革を第三の制度変更＝「平成の大学改革」とし、国公立大学を問わず優れた実践を横糸にし、この間の公立大学の急増とプレゼンスの向上を縦糸に分析したものである。これに続く本書の『公立大学論(下) 平成の大学改革の現場実践録』は、筆者が副学長として深く関わった「九州大学の改革」(第5編)、法人化初代学長として主導的役割を果たした「北九州市立大学の改革」(第6編)、公立大学協会会長の視点から国際人材や地域づくり人材の育成の実践として高く評価できる、大分看護科学大学、県立広島大学、市立高崎経済大学などの改革を「地方大学の挑戦」(第7編)として記述したものである。

\* \* \* \* \*

第5編九州大学の改革は、学府・研究院制度の導入(第3章)と伊都キャンパスの開発・統合移転(第4章)の二本柱である。

学府・研究院制度(第3章)についていえば、一体不可分となっていた大学院の教育研究組織を教育組織(学府)と研究組織(研究院)に分離し、学問の性格に応じて組み合わせることである。例えば、医学分野の研究に属するヒトDNA、農学分野の研究に属する動植物DNA、理学分野の研究に属する細胞学、膨大な情報処理研究を専門とするシステム情報学など、DNA関連の研究者が既存の研究組織のまま、協力して大学院の教育組織を編成し、若手の研究者を育成する必要が生じたので、独立の教育組織(システム生命学府)を設置した。

わが国の伝統的な大学の内部組織は、学部・学科、

研究科・専攻が一体で、新分野の教育組織が必要となると、教員を既存の研究組織から「半ば強引」に分離しなければならず、既存組織は強い抵抗を示す。これに対し九大では、学府・研究院を分離し、部分的に組み替えるだけで時代のニーズに対応できる教育組織を設置できる。学問の発展のなかで、必要となれば学内の教育資源の組み換えだけで大幅な教員増なしで比較的容易に設置することができる。これを「持続可能型」分離とよぶことにしたい。

かつて、教育組織と研究組織の分離は筑波大学で実施され、平成の大学改革で金沢大学や福島大学、大阪府立大学で、全学的規模のドラスチックな再編がなされた。こうした特定の時点での全学的規模の大がかりな再編は、巨大なエネルギーを必要とするとともに、特定の時点での特定の学問観に基づくもので、合意できない学内者の不満がくすぶり続け、管理運営の大きなブレーキとなる。これを「ドラスチック」型分離と名付ける。

九州大学では、それぞれの時点での関係者の小規模な教育組織と研究組織の設置がなされ、約20年後には、伝統的学問分野は維持されつつ、かなりの数の新学部・学科、新学府、新研究院が漸次設置されていった。「持続可能なシステム」である。北海道大学、大阪市立大学はこのシステムを採用しており、着々と新しい教育組織や研究組織が設置されている。

もう一つの改革の柱である伊都キャンパスの開発と統合移転(第4章)では、戦後の学制改革後、六本松と箱崎などのたこ足、狭隘、航空機騒音など多くのキャンパス問題を抱えていたことから長い間摸索が続けられ、約半世紀後の1991年市内西区の元岡地区への移転が評議会決定された。この間医学部・病院の移転の可否、適地の選定など学内議論を積み重ねてきた。

本章では、移転先の選定過程、新キャンパスのエリア決定、土地造成計画、ゾーニングと移転順序、造成基本計画、そして2001年の新キャンパス・マスタープランの決定までを「胎動期」(2000-2004年)、教育・研究施設の段階的整備を「誕生期」(工学系地区の竣工と移転、2005-09年)、センター地区の本部・全学教育関連施設の開発・整備(事務局および旧六本松地区機能の移転)を「成長期」(09-15年)、人文社会科学系および農学系地区整備(箱崎文系地区、農学系地区および農場移転)を「発展期」(2016-18年)と時期区分し、それぞれの整備過程を概略的に紹介している。ほぼ4半世紀に渡る275haの広大な伊都キャンパス(元岡地区)の開発・整備と統合移

転事業のうち、「胎動期」の約6年を担当副学長として中核的に関与した。「誕生」、「成長」、「発展」の期間は各地区の教育・研究・事務棟の段階的整備であり、地区計画、建築設計・建設、交通基盤整備、予算確保などが大きなテーマとなったが、「胎動期」は土地造成、各種施設の配置、学内交通の整備など全体のグランドデザインに関わるものであり、自然環境・歴史遺産・地域社会と密接な関わりを持つ最も重要な作業が課され、大きく六つの課題に直面した。

第一は土地買収と大規模な土地造成、第二は動植物生態系の改変、第三は水環境の保全、第四は古代の朝鮮半島との交流拠点であったことから発生する前方後円墳など埋蔵文化財の保存である。さらに、第五に、長期間にわたる新キャンパスの開発のための学内教職員の協働体制の確立である。いずれも、開発にともなって発生する諸課題を真正面から受け止めるとともに、土木・建築、都市計画、動植物生態、水循環、交通工学、考古歴史学など学内に蓄積されている知的財産を最大限に活用することが求められる。第六は、九州大学の改革のもう一つの柱である学府・研究院制度を新キャンパス計画、とくに教育研究施設の整備にどのように反映させるかである。

第一の課題については、移転対象用地を福岡市土地開発公社が桑原・元岡地区の山林所有者から先行所得（買収）し、これを順次九州大学に転売する。275haにのぼる広大な用地は、東西に細長く、南北に走っている地元の県道桜井太郎丸線（「学園通り」）と交差する。この道路は南進して、JR九州が設置する予定の「九大学研都市」駅と結ぶ。キャンパスは、この「学園通り」線と交差する形で東西の横長に「学内幹線道路」を展開する。この交差点に接する周辺をセンター地区とし大学講堂、本部事務局、およびかつての六本松地区が担っていた「全学教育」機能を置く。その東をイースト・ゾーンとし中央図書館、文系地区を置く。西をウェスト・ゾーンとして理学、数理学、情報システム、工学系、農学系地区を順次配置し、最西端に大規模運動施設を置く。学園通りの標高は約20メートル、東端の文系地区の造成基盤は40メートル、西端の農学系地区の造成基盤は約55メートルとかなりの高低差を設け、造成に伴う域外排出土砂量をできる限り少なくした。

第二の生態系の改変については、里山の伐採樹木のうち巨木を移植・保存、臨床土と根株の造成地法面への植え付けによる親和性のある土壌を基盤にした早期の緑地復活、敷地内を流れる大原川上流の谷の埋立計画を中止し、流域沿いに広大な池を残し、



これを「生物多様性ゾーン」とし、ここをカスミサンショウウオやイシガメ、ナンゴクデンジソウ、シャジクモなどの絶滅危惧種の生息地とし、研究・教育への活用など生態系保存策を実施した。

第三の課題は水循環である。広大なキャンパスが建設されると、降水が舗装を一気に流出するため、地下水への補給が激減し、地下水位が低下する。これにより、地下水に依存していた地域の園芸農業に甚大な被害をもたらすことが危惧された。そこで、キャンパス敷地表面に雨水浸透施設を設置して地下水位を維持し、また、既存の地元の水利権を攪乱しないように60%再生水利用の大規模な水循環システムを導入した。こうした自然環境に配慮した移転工事は、環境重視の開発としてNHKの約一時間の特別番組として報道され、環境と共生した土木事業として2002年に土木学会より「環境賞」を受賞した。

第四の課題については、造成工事のための調査で相次いで発掘された前方後円墳群、製鉄遺構、木簡などの埋蔵文化財については、学内の考古学や歴史学の研究者による「埋蔵文化財グループ」を設置し、学術的に検討し、そこでの意見に基づいて、多くの遺構を「地下に保存するため、土盛りして、遺構の位置関係と構造を正確に復元して展示し」、地上に構築物を建設しないよう、数度にわたりキャンパスデザインを変更した。

こうした第三、第四の課題対策、つまり、地域の自然と歴史遺産の保存に配慮して相当の費用を支出したことによって、「大規模開発」にもかかわらず、地域との大きなトラブルは生じていない。これは、K・W・カップが『私的企業と社会的費用』（篠原訳 岩波書店 1959）で、公害対策や文化遺産の破壊などの地域に与える怖れのある膨大な社会的費用を未然に防止するための初期投資の必要性を説いた、いわゆる「社会的費用論」を九大伊都キャンパ

スの開発に適用したもので、この初期投資は、文部科学省のマニュアルの枠を超えたものであるが、補償などの「社会的費用」と比較すれば、大幅に「節約」した。

第五の課題、すなわち長期間にわたる新キャンパスの開発のための学内教職員の協働体制の確立については、大きく二点に集約される。一つは、大規模総合大学が長期にわたる研究教育態勢を見据えて多数の学府・学部、研究院、研究所、図書館、実験施設、事務局の空間的配置をどうするかについて関係部局の意見を幅広く集約する体制を常時維持することである。そのため、各部局が参加する新キャンパス専門委員会を設置し、各地区の基本設計策定に責任を持つ体制を重視した。教育研究利用者の立場からの施設計画への責任的参画である。もうひとつは、学内の土木・建築、エネルギー、交通、デザイン、生態系、水循環、考古・歴史、情報・図書などの専門研究者が参画のテーマごとにワーキンググループを設置し、自らの研究の成果を持ち寄りそれぞれの分野のプロジェクトを策定していった。いわば、九州大学自体を新キャンパスづくりの巨大「シンクタンク」としたことである。しかも、提案する個々の知見には原則として「支払わない」ことから、最新の技術や知見に対する費用は、大幅に節約された。総合大学ゆえの大きな利点である。

最後の学府・研究院制度と新キャンパスの教育研究施設の整備については、次のように工夫されている。欧米や日本の伝統的な基幹大学では、各学部・学科ごとに一つの独立した建物として存在し、建物がクワドラングル (Quadrangle) やヤード (Yard) とよばれる中庭を取り囲む形態で、内部には、ぐるりと小講座の研究室が取り囲むように配置されていたが、学府・研究院制度のもとでは、学部・学科・講座などの専門領域 (Discipline) が相対化され、各ディシプリンの自律性を確保しながら、それらの交流・連結を重視し、全体が一つの知的生命体として時代の要請に変化・増殖していける空間構成を形成している。

キャンパスの東端に位置する文系地区を例にとると、幹線道路に隣接して4階建の半円形のドーム状の巨大な中央図書館を配置し、その上に大講義室と食堂などの福利厚生施設、その北側に教育研究棟が整備されている。「教育研究棟は、各部局の独自性に配慮し、部局ごとのブロックを連結した構成とするが、中央図書館との関係性及び部局間の関係性をもとに空間的に連結し、南側から順に経済学、法学、

比較社会文化・言語文化、新統合領域・人文科学、人間環境学を配置している」、そして「複数部局の共同利用に配慮し、講義室、生活支援施設、全学共用スペース、プレゼン・スペース、展示用インナーモール等を教育研究棟の低層部の1, 2階に」配置している (九州大学キャンパス計画室編『伊都キャンパスを科学する』62頁)。この人文社会科学系教育棟の最上階には、「記録保存のうえ削平した石ヶ原前方後円墳の位置に眺望がさく展望台、展示場を設け、地域の歴史にふれる」工夫がされている。ここからは、隣接する水崎城址、さらには遠方に博多湾と福岡市街地が一望できる。つまり、各部局は「ブロック」として自立しつつ、建物内部は空間的に連結し、大講義室や生活支援施設は共同利用するように工夫され、なによりも四層の吹き抜けをもつ巨大な中央図書館へのアクセスが最大限に重視されている。

ところで、筆者は、2001年11月杉岡洋一総長の任期とともに大学改革・キャンパス統合移転担当副学長を退任し、約8か月の休養ののち、翌2002年7月に経済学研究院長 (学部長、研究科長兼任) として、2004年3月の定年まで2年弱の期間学部運営に参画した。ここでは、計画が進捗していたビジネス・スクールの設置に奔走し、開校にこぎつけた。大学紛争後30余年、大学のシステムが硬直化し、教員が教育よりも研究に、学生が学習よりも単位取得に走り勝ちとなり、教育現場の実質的空洞化が進んでいた中で、本当に学習したい社会人学生と日本スタイルのビジネスを後輩に伝えたい実務経験豊かな教員による出会いの場を提供するビジネス・スクールの設置の動きにのり、2004年4月に先陣を切って開校した。それから16年一橋、神戸、京都とともに、九大ビジネス・スクールは安定した社会人教育の実績を誇っている。

\* \* \* \* \*

本書の第6編「北九州市立大学の改革—法人化を活用した大学改革」は、筆者が九州大学停年退職後、2005年に公立大学法人初代の学長として勤務した大学の改革について述べた。

「受験者数のV字型回復」、「留年生40%減」、「教員30名増加・女性教員倍増」、「教養教育の再生」、「地域創生学群の新設」、「ビジネス・スクールの設置」、「カーエレクトロニクス大学院コースの開設」、「地域貢献 日本一」——これが本編転載のもととなった著作『北九州市立大学改革物語』(九州大学出版会 2010年)の帯に記された「6年間の改革の

成果」の一覧である。わずか6年間で上げた成果の裏にある大学のガバナンスの転換の背景について簡潔に述べることで「北九州市立大学の改革」の根幹に触れてみよう。

北九州市立大学は、戦後設立の小倉外事専門学校をへて1952年小倉市立北九州外国語大学として1950年開校、53年に商学部（のち経済学部）を設置して外国語学部と2学部を持つ北九州大学と改称。さらに、文学部、法学部、および大学院研究科を併設し、文系4学部を小倉南区の北方キャンパスに擁し、「北九大」の呼称で約半世紀の間、地域に定着してきた。その後、若松区の北九州学術研究都市に早稲田大学、九州工業大学に隣接して「国際環境工学部・同大学院」を新設し、2000年に北九州市立大学と呼称をかえて学生数6000人規模の文理総合大学として、東京都立大学、大阪府立大学、大阪市立大学、名古屋市立大学、横浜市立大学とともに公立大学協会の中核的地位を保持してきた。

ところで、文理総合かつ有力な公立大学である北九州市立大学のガバナンスの当時に実態を簡潔に述べてみよう。一言で言えば、一つの経営体ではなく、文系四学部の一つの理工学部を加えた「学部連合体」である。その基礎は各「学部教授会の自治」である。各学部教授会は、構成する教員の合議体である。合議の中心は、教育の内容を規制するカリキュラム編成であり、それを担う教員の人事である。教員人事とは、常勤教員の採用と昇任、および非常勤教員の補充である。教員の日常の最大の関心事は、自らの研究と教育、そして教授会における人事である。ここでは「多数決」という民主主義が原則となっている。大学の運営は、こうした個々の教授会の「合議体」として機能している。入学試験、教養教育、学生対策、学部・学科の新増設などは、個々の教授会の合意が不可欠であり、各学部は全学的課題について事実上の拒否権さえ有している。入試・教養教育・学生対策・予算編成などの学部を超えた課題については、それぞれの学部から指名された委員によって構成される専門委員会によって対応する。専門委員会の委員長は、各学部間の持ち回りとなっている。教授会内部の運営は、教授会で選出された学部長を中心に運営されるが、学部長自体は多くの場合「適任者」の年功序列的要素が強い。したがって、定年まぢかの適任者が選出され、短期間担当した後順番に交代する。ガバナンスのノウハウは組織内部で蓄積されにくい。教員人事を除けば、予定調和的な運営がなされる。個々の人事だけは、教授会の「派閥」

に影響するから深刻な議論を展開する。こうした大学のガバナンスについては、民間企業人にとって強い違和感をもつであろうが、多くの国公立大学人にとっては、ほとんど異論のなく粛々と続いてきた。

しかし、科学技術・文化の急速な発展、政治経済・社会の激しい変容、18歳人口の急激な減少に伴う厳しい大学間競争のなかでは、長期的戦略を欠いた「牧歌的」経営は、「敗北」の道を辿らざるを得ない。事実北九州市立大学の受験者数は、長期低落傾向にあった。法人化に求められるのは、明確な中長期的戦略の策定と教職員一体となった実行である。こうした予定調和的・牧歌的な経営、教員の研究・教育埋没の日常こそ大きな変革が求められた。

筆者が法人化初代学長として最初に取り組んだのは、大きく二つある。一つは、行政文書として一次的に羅列されている中長期計画の項目を、大学幹部はもちろん、全教職員が共有するために「デザイン化」することである。そこで、鳥の翼にみたく、左の翼に「教育」、右の翼に「研究」、尾翼に「社会貢献」、頭部に「経営」、心臓部に「学部・学科再編」の項目（全部で169項目）を配置し、二次元的に表現する。そのうえで、それぞれの翼の中心的プレーヤーを明確にする。両翼の主役は「教学」を担う教員であり、職員が密接に関わる。教育研究審議会、各学部教授会、教務・学生などの全学委員会の意思が重視され、受益者としての学生の一定程度の参画がなされる。尾翼は、社会貢献の中心となる教職員および受益者としての企業・市民である。頭部の経営については、法人化の趣旨から執行部と経営審議会が責任を負い、これを事務職員が支えらるとともに、設置団体であり、運営交付金を支出する北九州市も関与する。また、全学に関係する組織再編については、経営サイドと教学サイドの協力が不可欠であるから、両方のインターフェイスである心臓部に位置する。こうして各部位の分担を明確にすることにより、「三次元」化し、さらに「工程表」と言う時間軸を加えて「四次元」化した。これを北九州市立大学の「北」の字になぞらえてデザイン化し、「北の翼」と命名した。

これによって、大学構成員がどこに責任を持ち、それが全体の改革とどのように関わるか容易に理解できる。また、計画の進捗に従って、各部位間のバランスに配慮しながら計画項目を「帳面消し」することができる、という効果がある。

もう一つの課題は、法人化に伴う中長期計画を全学でどのようにスピーディに実行するかということ

である。「北の翼」というロードマップができて、それを実行する駆動力が必要である。その駆動力として新しいシステムを採用した。まず、入学から就職まで一貫した教育システムを前面に掲げ、入試・教養教育・学生対策・就職指導という学生教育の流れを、学部間調整ではなく、学長直轄体制とした。それには、入試・広報センター、基盤教育センター(教養教育)、学生部・学生委員会、キャリアセンター(就職対策)の責任者を各学部選出委員の持ち回りでなく、学長が全学的見地から40歳台の若手教授を直接指名するとともに、学長、副学長、各学部長等によって構成される教育審議会の正式委員とした。これらの全学的に重要なテーマを各学部の意向を反映するのではなく、独自の判断で執行することができるようにした。加えて、これらの専門分野の委員長によって構成される委員会に学部長会議とは別建てで中期計画の考え方に基づく学部・学科再編の原案の作成を依頼した。責任者には学長の意向を反映する副学長が就任した。つまり、各学部連合体的管理システムではなく、次世代の大学を担う若手教授陣による事実上の全学的な運営システムに転換したのである。ここでは自由かつ活発な議論がなされ、次々と具体的改革案が提示された。学部提案型の「ボトムアップ」でもなく、学長主導の「トップダウン」でもなく、若手教授主導の「ミドルアップ」型改革である。

ここから次々と改革案がだされた。一つは、教養教育改革であり、それまでの全学教員動員型から「基盤教育センター」という独立した組織を設置した。当時ほとんどの国立大学が採用した独立組織「教養部」の解体・全学教員動員方式と「真逆」の戦略を採用した。もともと、1991年の設置基準の大綱化は、専門教育との関連で従来の硬直した教養教育を見直すことを求めたのであって、その趣旨に沿って新たな教養教育カリキュラムを策定するとともに、全学動員方式という「無責任体制」を是正することを意図したものである。この「基盤教育センター」は一年間の準備期間を置いて新しい教養教育のカリキュラムを策定し、外国語や保健体育担当で主として文学部に所属していた教員、外国人で長い間「語学教師」として非常勤扱いであったネイティブ・スピーカーを専任教員化し、さらに学長預かりとなっていた「空きポスト」を加え、開設された2006年には23人の専任教員が配置された。

学部学科再編の第二弾は、地域創生学群の設置である。もともと北方キャンパスの文系4学部が夜間主コースがあったが、年々志望者が減少し、設置趣

旨の勤労学生の学びの場としての機能が果たせなくなってきた。そこで学生定員152名中62名を昼間主に振替え、残り90名を昼夜開講の「学部」とし、地域づくり人材育成に特化することにした。カリキュラムの大半は地域福祉、地域マネジメント、地域ボランティアなどの地域現場実践である。学内講義中心(オン・キャンパス)から学外中心(オフ・キャンパス)のカリキュラム編成とした。この地域づくり人材養成の教育は、2009年からはじまり、社会性、人間性、実行力を身に付けた卒業生の輩出によって10年間にわたって就職率100%を続け、一挙に北九州市立大学の看板学部となった。

第三弾は、ビジネス・スクールの設置である。もともと、経済学部内の経営系の教員を中心に北九州市立大学ビジネス・スクール設置の動きがあり、専門職大学院のカリキュラムに沿った教員の採用を行ってきた。学長就任以来1年かけて市の幹部職員、地元の企業幹部、NPO代表などを採用する人事を行い、2007年に九州大学に次いで九州で2番目のビジネス・スクールを設置した。

以上、基盤教育センター、地域創生学群、ビジネス・スクールなど3つの教育組織を矢継ぎ早に設置する過程で、学内の教員人事の新規の教員増と既存の教員の大幅な学部間異動が行われた。筆者が学長に就任した2005年度初めから退任する10年度末までに教員数は230名から267名へと一挙に37名増加した。この間文系4学部の教員の4人に1人は所属部局を異動した。教員の学内組織間異動は、長い間「固まった人間関係」によって確立されていた学部内派閥争いが解体され、組織が活性化したことも否定できない。

北九州市立大学の改革は、こうした管理運営システム、教育組織再編と教員人事など根幹部分の改革とともに、学生生活へのサポート及び地域貢献など多方面にわたっている。紙数の関係でいくつかふれるにとどめたい。

学生は、大学生生活のなかで多くの課題に直面する。大学はこうした課題にきちんと対応しなければならない。学習、進路、心の悩み、健康問題等々である。これらに個々に対応するため、相談機能が学内に分散的に配置されてきた。法人化によって大学独自の予算で工事が可能になったので、学長就任2年目の2007年にこれらの機能を拡充しつつ、一か所に集中した「学生プラザ」を、学生が集まりやすい正面玄関に隣接して設置した。のちに大学の看板の一つとなり、他大学のモデルとなった、相談機能のワンストップ化である。進路指導・就職支援の「キャリア

センター」、学習および生活指導の「学生相談室」、心の悩みに対応する「カウンセリングルーム」、「保健室」、そして学生同士の自由な企画の場となる「プロジェクトルーム」が一か所に集まり、ここに教職員、保健師、カウンセラー、企業OBの就職支援職員が常駐している。そのうえで、この学生プラザを舞台に、「早期支援システム」と言うプロジェクトが開始された。これは、北方の文系キャンパスの必修授業や語学・演習などの少数数授業を「センサー科目」に指定し年2回一定期間に連続して出席をとり、3回連続して欠席した学生を対象にして、学生相談室担当教職員が事情を聴くというものである。調査学生のほぼ2～3%が聴取対象となり、その多くはアルバイトや生活の乱れが原因で、なかには健康や心の悩みをかかえたものが3割から4割を占めている。前者は生活指導、後者は医師やカウンセラーが対応している。この結果、留年生の数が、支援システム導入前から約40%と大幅に減少し、以後文系学生特有の「高い留年率」は低位にとどまっている。

こうした学生生活への丁寧なサポート行動が、学生の保護者、出身高校の教員など地域のミニコミの着実な上昇をもたらし、北九州市立大学の一般志願者が2006年度の4,533名をボトムに着実な増加を見せ、5年後の2010年度には一挙に6,291名といわゆるV字型回復を示した。また、地域創生学群やビジネス・スクール、さらには北九州学術究都市における九工大、早稲田と連携したカーエレクトロニクス大学院コースなど地元の社会人の教育の充実、研究での産学官連携九州国際大、九工大・九州歯科大、下関市大などとの地元の大学間連携、子育て支援や大學堂などとの地元商店街連携など多面的な活動が評価され、日本経済新聞による全・国公私立大学の「地域貢献ランキング」で何回となく「一位」となった。

\* \* \* \* \*

本書の第7編は、「地方大学の挑戦」として、いくつかの地方大学の改革の現場実践例について紹介した。戦後すぐに中核市が設置し、特定の専門分野ではなく総合的な学力を有し、卒業生が全国の地域づくりに貢献している高崎経済大学、県民の要請に応えた分野の人材教育の実績をあげている県立広島大学、平成の大学改革の一環として設置され、地域医療に目覚ましい成果を上げ看護大学のトップランナーを走っている大分看護科学大学、国立大学でありながら、総合性・実践性を重視する地域づくり人材の育成を目指す宮崎大学地域資源創成学部、福岡の地に根づいた私立大学が特定の専門分野に偏らず、

地方公務員や地域企業で地域づくりに役立つ総合力を身に付けることに教育目標を置いた九州産業大学地域共創学部の六つの地方大学をサーベイした。こうした地域づくり人材育成にむけた地方大学の挑戦は、静岡文化芸術大学、鳥取環境大学、高知工科大学、名城大学など全国から多くの希望者を集める公立大学が注目を集め、近年、これらの大学に続き、私立大学の公立大学化が増えている。

## 『お酒の経済学』

—日本酒のグローバル化からサワーの躍進まで—



一橋大学名誉教授  
日本酒学研究会副会長  
つる 康氏  
**都留 康氏**

### 亡父・都留大治郎とお酒

この文章の執筆機会を与えていただいたのは、いうまでもなく、わたしが都留大治郎の息子だからです。それゆえ、父のことから語りはじめるのが自然な流れでしょう。

この「同窓会報」の読者のみなさまは、直接的または間接的に父のことをご存知のことでしょう。都留大治郎を語る時、必ず「酒豪の」という形容詞が付くのではないのでしょうか。しかし、わたしは、父の外での本当の姿を知らないで、お酒にまつわるいくつかの個人的逸話を紹介します。

1つは、来客のとても多い家だったということです。学生や大学院生をはじめとして、すでに大学の先生になられたような方も、よく飲みに来ていました。それほど野間大池のわが家の居心地がよかったのでしょうか。そういうときに必ず受ける質問は「大きくなったら何になるの?」でした。純粋なわたしは「お酒のお酌をする人」と答えていたそうです(小学生の低学年くらいまで)。しかし、物心つく頃には、そういう来客たちの一部は、「社会人としての常識にどこか欠落部分がある」と子供心ながらに感じ、敬して遠ざけるようになりました。

2つ目は、父が通っていた居酒屋に連れて行かれた記憶です。記憶がはっきりと残っているのは、天神にあった「H」です。ここは、福岡の財界や政界の人たちも出入りしていたようなお店でした。中学生の頃、「H」のお嬢さん(だいたい同じくらいの



学年)がなぜかわが家に時々泊まりに来ていました。明るく美しい方でしたので、もちろん気に入りしました。

ただ、あるときから、父の行く店が警固の「T」に変わりました。理由はわかりません。「T」には終生通っていました。女将さんの機知とさっぱりした気性がたぶん性に合っていたのだと思います。

3つ目は、高校を卒業して大学進学時に家を出る直前に、博多一の高級クラブ「みつばち」に連れて行ってくれたことです。「みつばち」は日本3大ママと言われた武富京子さん(野見山暁治画伯の妻)が経営していたお店です。武富さんと「みつばち」のことは、野見山画伯の日経新聞「私の履歴書」(野見山暁治『いつも今日』、日本経済新聞出版、2005年に再録)に詳しいです。

なぜそんな高級店に連れて行ったのかは謎ですが、「お酒を飲むのだったら、たまにはこういうきちんとした店に行きなさい」という大治郎流の教えだったのかもしれませんが。それが災いして、銀座や北新地の高級クラブに、ボーナスが出た後や企業経営者に連れられて、ごくたまに行くという悪習が身につきました。ただし、ママの「黒革の手帖」には、もちろん何も記載されておりません。

### 人事と組織の経済学からお酒の経済学へ

こういう環境で育ちましたので、若い頃からお酒が好きで、日本酒や焼酎の蔵元、ビール工場、ウイスキー蒸留所などの見学によく出かけていました。行くと必ず造り手の話も聞くようになってきました。これはわたしの専門分野である「人事と組織の経済学」で行う聞き取り調査と同じことです。

しかし、お酒の研究は、ある年齢まで「封印」してきました。本業できちんとした業績を上げることが研究者としての義務だからです。でも、定年が近づき、本業での責務もそれなりに果たせたと思えた頃から、徐々に「封印」を解いていきました。

本業の分野での最近の著作は『製品アーキテクチャと人材マネジメントー中国・韓国との比較からみた日本』(岩波書店、2018年)です。この著作で2008年から10年間に及ぶ国際比較研究に一区切りを付けました。この研究過程で中国や韓国の企業を数多く訪問して聞き取り調査を行いました。そのときに感じたのは、中国や韓国での日本料理や日本酒の人気の高まりでした。コンビニやスーパーでは日本産ビールもよくみかけました。

『製品アーキテクチャと人材マネジメント』では、製品開発の上流工程(市場のニーズを探り、製品



学部長時代の都留大治郎先生

のアイデアを出し、製品コンセプトとアーキテクチャを決める段階)と下流工程(製品の設計図を描き、試作をする段階)の組み方と、そこで働くエンジニアの人事管理の方法を分析しました。

この上流工程から下流工程への流れは、お酒の開発にも当てはまると気づきました。お酒のヒット商品である、日本酒の「<sup>だっさい</sup> 獺祭」や「<sup>あらまぶ</sup> 新政」、ビールの「スーパードライ」、「一番搾り」、「ザ・プレミアム・モルツ」、焼酎の「いいちこ」や「黒霧島」の開発過程を調べると、本質的には、製造業やソフトウェア業の開発と何ら変わりはないのです。

これから、経済学や経営学の観点からお酒を分析すると面白いのではないかと考えました。

### 『お酒の経済学』が目指したもの

酒類の国内出荷量(課税移出数量)は、1999年度の1017万キロリットルをピークとして減少し、2018年度には、99年度比の85.5%(870万キロリットル)にまで減少しました。1人当たりの年間酒類消費量をみると、消費全体よりも早く1992年度の101.8リットルをピークに減少しはじめ、2017年度には、92年度比の79%(80.5リットル)になりました(国税庁『酒のしおり』2020年)。

酒類別の消費動向も大きく変容しています。国内消費のピーク時の1999年度の総量1017万キロリットルのうち、ビールが実に71%を占め、次いで日本酒が14%でした。直近の2018年度には、ビールは首位ですが28.6%に落ち込み、第2位はリキュール(27.6%)、第3位は発泡酒(7.4%)、日本酒は第4位(5.6%)となっています。消費の減少と多様化とが同時に進行したのです。

『お酒の経済学』では、「日本の酒類の生産から消費まで」を、経済学と経営学の視点から平易に解説することを目指しました。新聞やビジネス誌での個別的・断片的情報は多いですが、日本のそれぞれの酒類の動向と特徴を、経済学・経営学のロジックできちんと解説した類書は意外と少ないのです。

まず、お酒をめぐる社会的・経済的・法制度的要因を概観しました。次に、日本酒、ビール、ウイスキー、本格焼酎の生産と消費を詳論しました。さらに、各酒類のグローバル化(輸出と現地生産)がどこまで進んだか、課題は何かを明らかにしました。

最後に、日本の酒類が日本と世界でさらに飲まれるために何が必要かを示唆しました。

日本の酒類は、先に述べましたように、国内においては消費の低迷にあえいでいます。しかし、その低迷の中でも再生への胎動がみられます。ひとつは、製品差別化により国内需要を回復させている高級な日本酒やウイスキーの動きです。もうひとつは、輸出の急増です。これは、日本酒、ビール、ウイスキーに当てはまります。Made in Japanの高品質ブランドを維持できるか、問われています。国内での消費低迷を海外輸出と国内での新たな需要創出で補おうという方向は、日本の多くの産業に共通するものだと思います。その意味でも、身近な酒類について経済学・経営学の視点から考える意義は大きいのです。

### 個人的な嗜好

本書の刊行後、「お酒の中で何が好きですか?」「お勧めの銘柄がありますか?」という質問をよく受けます。いろいろな酒造メーカーに調査協力をいただいたので、残念ながら後者の質問には答えないことにしています。しかし、前者の質問への答えは単純明快。全部好きです。

ただし、「ものには順番がある」というのが私見です。「順番」とは食前酒、食中酒、食後酒です。食前酒は何ととってもビールです。かっこよくいうと「とりビー!」(福山雅治)です。

食中酒は料理との「ペアリング」が大事です。刺身には何ととっても日本酒です。白身の魚には冷たい日本酒が合いますが、脂ののった魚には「ぬる燗」も合います。純米吟醸酒も「冷やして飲むもの」という固定観念をもたずに、お燗にしても美味しいですよ。

食事が洋風や中華系のものになると今度は焼酎の出番です。真冬以外はだいたいロックでいただき、寒い日はお湯割りにします。以前は、日本酒→焼酎だけでしたが、最近はその間にウイスキー・ハイボールも加わります。本書では取り上げることができませんでしたが、食中酒としてワインも欠かすことはできません。ただし、ワインは刺身には合いません。ワインに含まれる鉄分が「生臭さ」を発生させるといふ研究結果もあります。

食後酒の王道はウイスキーです。ジャパニーズ、スコッチ、バーボン、その日の気分で決めます。あるいは、原酒を長期貯蔵した焼酎も食後酒には最適です。

### 日本のお酒の未来

近年、日本の酒類の輸出が急ピッチで進んでいま

す。お酒のグローバル化は、海外での和食人気と手を携えて進みました。和食の完成形態は茶懐石でしょう。それは、飯、汁、向付にはじまり、煮物や焼き物を経て、菓子、濃茶、薄茶に至るフルコースです。これに合うのは日本酒です。

これは、フランス料理のフルコースにワインを合わせるのと同じ正統派です。この分野での強みは、純米吟醸酒など的高级な日本酒にあります。

しかし、日本人は毎日、茶懐石のような正統派の料理を食べているわけではありません。むしろ、かなり「雑食」系といえるでしょう。現在では、どの国でも、外国の料理を好んで食べています。中華料理やイタリアンはその典型でしょう。しかし、日本が海外と異なるのは、中華やイタリアンの要素を一食の中に取り込むところにあります。

たとえば、居酒屋で人々が宴会をする光景を思い描いてください。最初にビールで乾杯して、日本酒で刺身を愉しみ、ウイスキー・ハイボールや焼酎で餃子やピザをつまむ。健康を考えてシーザーサラダも出てきます。メはカレーチャーハンかもしれません。このような多様性は、海外ではなかなかないと思います。

日本の酒類のグローバル化をさらに進めるためには、このような日本の食文化の「あるがままの姿」を発信することが重要です。

現在は、「新型コロナウイルス感染拡大」の影響でグローバル化にストップがかかっています。しかし、人類史における過去のパンデミックと同様に、人類はこの危機を克服していくと信じています。蒸留酒を「命の水」と呼ぶのは、大流行したペストから身を守ったからという説があります。その真偽のほどは定かではありませんが、危機を乗り越えるためには、美味しい食事とお酒で元気を維持することはとても大事でしょう。

東日本大震災のときの復興への合言葉は「絆」でした。「新型コロナウイルス感染拡大」阻止のキーワードは「社会的距離」です。あたかも「絆」を断ち切ることが必要だといわれているように聞こえま



す。

でも、オンライン飲み会にもみられるように、コミュニケーションは人間の本質です。コミュニケーションの少ない社会は不幸です。新しいアイデアも生まれません。わたしは、親しい友人と開店直後のお客のいない居酒屋によく行きます。そこでの感染

リスクはほぼゼロだと考えるからです。居酒屋は日本に固有の文化です。そして、文化は「社会の生命維持装置」にはかならないのです。

(本稿は、web中公新書「著者に聞く」に大幅に加筆修正を加えたものです)

## リレー随想

### コロナ禍に愚考を



尾木 信芳氏

1966(昭和41)年卒

ふと気づいてみるといつの間にか齢78になって、いったい誰なのだ、この老人はと尋ねる連れ合いも既になく街並みはコロナ猖獗で人影もまばら。

新型コロナは全世界で一億人以上に感染、死者は二百万人余と報じられている。このようなパンデミックは私の一生でももちろん初めてのこと。ワクチンも一般には届いておらず、私たちはマスクが必携品となり自宅に籠るぐらいしか防御策はない。

60年前私は昭和37(1962)年4月に経済学部に入學。受験勉強から解放された嬉しさに「学問するぞ!」と受験参考書を放擲して最初買ったのが、岩波書店版の箱入り・薄葉紙包装『社会思想史概論』(高島善哉・水田洋・平田清明)だった。バラリと広げると今まで接したことのない難しげな翻訳日本語に触れ「人間解放」などという考え方もあるのだとの感慨に胸が熱くなったような気がした。この書物ではマルクスなどの社会主義思想がメインテーマとなっていて、それではと母に大月書店の「マルエン全集」を買うと申告して送金してもらい10冊ばかり買って、勿論ほとんど読まずに「積ん読」と化した。とは言え同じ時期に初期マルクスに関する論考(例えば吉本隆明「マルクス伝」)などに触発されて『経済学・哲学手稿』(国民文庫)などを読んだ。経済学の勉強というよりは人生如何に生きべきかというような人生論的なアプローチが強かった気がする。破綻しつつあった初恋に関してマルクスは「あなた

が愛しても相手が愛さず、あなたの愛が相手の愛を作り出さず、愛する人としてのあなたの生命の発現が、あなたを愛する人にしないなら、あなたの愛は無力であり、不幸だと言わねばならない」(長谷川宏訳)と愛の力学(弁証法?)を教えてくれたが、生命の発現をはかる術もなく時を得なかった。

私が在學当時の経済学部は向坂逸郎教授のマルクス経済学の講義があっただが受講した記憶はない。教授の論考は血気盛んな青年にはあまり魅力的には見えなかったのだろうか。教授の『マルクス伝』も読んだけど、その思想的な力動感が描かれていなかったように思えた。時代も移りソ連が崩壊して、マルクスは柄谷行人などから読み替えが行われてきたように思えるが、『武器としての資本論』(白井聡)『人新世の「資本論」』(斎藤幸平)など、コモン社会構築などの新しい展開が見られるようになってきてNHKですら「資本論」の解説など行われるのをみると、時代の変化を感じざるを得ない。

最近は私自身の年齢からも「終活」としてのマルクスの読み直しも時折して、なにか手助けになるものはないかと探してみると、例えば経哲手稿に「死は、特定の個人に対する類の冷厳な勝利であり、個人と類との統一に矛盾するように見える。しかし、特定の個人は特定の類的存在にすぎないのであって、特定の存在であるから死をまぬがれない」(長谷川宏訳)と彼はやはり若い頃からちゃんと論考を構えていた。論述に得心はできないが死を俯瞰する思考の位置があるのだというのはいささかの慰めにはなるように思える。個としては消滅せざるを得ないが類として永続する矛盾が個にとっての背負うべき死であると観念したのだがどうだろう。慰謝にはならないけど。むしろ親鸞の「歎異抄」にあるように「名残惜しく思えども、娑婆の縁つきで力なくして終わるときに、かの土へは参るべきなり」と考えるのが実感的な気がする。「縁がつきる」という誰も外からは知ることのできない内密の感情が、自分を恐らく支えてくれはしないかと心に秘めているのだけど。

マルクスの著作は1975年頃から全集追加が編

集されているようでMarx-Engels-Gesamtausgabe (MEGA) と称されて100巻を超えるとも伝えられている。もちろん私が手にすることも無いけど、これからの人々が新しい思想を展開して〈脱資本主義〉の未来像を描いてくれれば嬉しいし、世界はコロナ蔓延とともに超資本主義（利潤のグローバリズム）の限界を赤裸々にしつつあると感じる巢ごもり老人の徒然<sup>つれづれ</sup>でした。

## リレー随想

# 武野先生の思い出



九州大学名誉教授  
熊本学園大学 学長  
**細江 守紀氏**  
1970(昭和45)年卒  
1972(昭和47)年博士入

武野秀樹先生とは、昭和44年でしたか私が九州大学経済学部編入した年に呼び出しがあり、研究会に参加しないかということでお会いしたのが最初でした。J.JonstonのEconometric Methodsを読んでいくというもので、先生と当時の博士課程の時政勲氏（広島修道大学名誉教授）と3人で輪読していったと記憶しています。世の中、安保で騒然としているなか、その時間だけ別世界のようで、ただただ数理統計学をつかった経済学の手法を習得していきました。今では当たり前のように学部授業で使われるスタンダードなテキストですが、当時はこれから発展していく学問分野がどうかわからないまま、ひたすら数理的な論理を追い求めることでなにか充実感に浸っていたようでした。先生は大変冷静で論理的な方で、物事をきちんと筋道を立てて把握され、それに基づいて人に対処するという具合で、あまり情緒的に、あるいは気さくに話されたりする方ではなかったようでした。私のまわりの先生方ではそんなタイプの人は見かけなく、いったん話を始められると長い時間話されるので忍耐力がとにかく養われました。それでも反時代的な雰囲気、時代に迎合しない雰囲気が気に入っていました。

先生のご専門分野は国民経済計算と言われる分野で、国民経済を体系的に記録するシステムである国民経済計算体系の構造と特徴をモノ、カネ、フロー、ストックという観点から総合的に解明する研究で、

人々の経済活動の結果を体系的に記録する学問です。通常は人々の行動そのものを学問の対象にし、それが経済結果にどのように影響するかに関心をもつものですが、あえて経済結果の記録の体系の学問を選ばれたのは先生の日頃の思考方法、発想方法からして納得のいく選択だったと思います。先生は、ミクロ経済学、マクロ経済学と呼ばれるものの経済的基底をあきらかにしていく作業を淡々と進められました。

先生は多くの弟子を育てられました。私を含め、先生の学問分野を直接継承した研究者はごく少数で、その点、先生には申し訳ないと思うことがあります。裏返していうと、ご自分の院生たちには特定の研究分野を押し付けることなく伸び伸びと各人の思うままに研究をさせていただきました。その点大変感謝しています。その代わり、大学院の授業では数理的思考・知識を徹底的に教育されていました。位相数学やプール代数の基礎など今考えてもそこまで追求しなくてもよかったと思われる数学分野の書物まで勉強しました。現在のように博士課程のときから査読論文を要求される時代にはそんな指導方法はできないと思いますが、当時としては大変有用な教育方法だったのではないかと考えています。

昭和52年に九州大学経済学部新しい第三の学科経済工学科が開設され、その四つの大講座の一つが計量経済学講座でした。数学や統計学を駆使して経済現象を解明していく分野で、武野先生と、同門の山崎良也先生とがその講座の教授となられました。昭和56年に私はその講座の助教授として赴任しまし



学部長時代の武野先生



院生時代の武野ゼミ合宿  
後列右から3番目が武野先生、前列右端が筆者

た。先生から多くのことを学びましたが、いろんな風が吹いて人はあれこれ左右されるが、最終的に落ち着く先をしっかり透徹した目で理解し、それに向かって進みなさいと絶えずおっしゃっているようでした。不肖の弟子で、この年になっても先生のご指導にはお応えできていず自戒しています。

武野先生にはいつまでもご健康でお暮しいただきたいと念じています。

## リレー随想

### 武野ゼミ雑感



九州大学名誉教授

**大住 圭介氏**

1970(昭和45)年卒

1972(昭和47)年博士入

昭和41年に九州大学経済学部に入學し、当初六本松の教養部ですごしたのち、箱崎の経済学部に進学した。経済学部に進学後、友人の加藤義博・河野晃廣氏と一緒に武野秀樹先生のゼミに参加した。当時の九州大学ではマルクス経済学がほとんどであり、武野先生が高田保馬・栗村雄吉先生の近代経済学の講座を継いでおられた。そのこともあって、当時の九州大学経済学部の同級生で近代経済学を専攻していたのは我々3名のみであった。

3年次に参加した学部ゼミでは、テキストとして二階堂副包『現代経済学の数学的方法』(岩波書店)が使用された。このテキストは非常に難解であり、私の九州大学の学部・大学院の教師体験からして、現在の大学院博士課程の院生にとっても理解に難渋すると思われる。私は当時、デカルト、バートランド・ラッセル、ワイトゲンシュタイン等の本を中心に読んでおり、大学紛争の混乱の中で厳密な思考と論理実証主義に憧れを持っていたので、厳密な数理的論理に基づいて経済を分析することに大きな感銘を受けた。高田保馬先生の伝統を引き継いで、武野ゼミでは、報告箇所について行間を読み取り、徹底的に考え抜き、厳密に論理を追求することが求められた。ゼミでは同書の途中までしか進まなかったが、その後、個人的に単独で最後まで読みすすめ、不動点定理を利用した(アロー=デブリュー=マッケンジー)一般均衡理論の均衡解の存在証明まで読了することができた。この経験が研究者の道へ推し進め

たと思う。先日、加藤・河野氏に当時のゼミの感想について訊ねた際に「学問は容易ならざるものであり、真理の追究というものはこういうことだと教えてもらった。社会に出てからも生き方として役に立った」と感謝していた。

4年生になってから、松沢俊雄氏(大阪市立大学名誉教授)他6名の3年生がゼミに参加した。ゼミでは、R.G.D.アレン『現代経済学上・下』(東洋経済新報社)の上巻が使用され、ケインズ理論のフレームワークに関するヒックス流の均衡論的解釈の理解を深めることができた。個人的には、4年生になってから、当時大学院在籍中の山下正毅氏(横浜国立大学名誉教授)と2人で、二階堂副包『経済のための線形数学』(培風館)を1年かけて読み進めていき、非負行列の構造の美しさに魅了されて大学院進学を決めた。

昭和45年4月に大学院に進学し、細江守紀氏(九州大学名誉教授)、是枝正啓氏(長崎大学名誉教授)と一緒に武野研究室に参加した。当時、武野研究室の修士2年次に、江副憲昭氏(西南学院大学名誉教授)がおられ、先述の山下氏は助手をされていた。大学院のゼミでは、動的経済分析のための数理的研究を中心に指導された。後年渡米し、L.W.マッケンジー教授のもとで非線形多部門成長モデルを研究し、英文の著書Economic Planning and Agreeability, Kyushu University Pressを完成させる際に、当時の経験が役に立った。

最後に、研究者の道に進むきっかけを与えていただき、高田保馬・栗村雄吉先生の精神・伝統を継承された「真理の追求」に対する武野先生のご指導に感謝している。

## リレー随想

### 同窓生との縁を大切に



(株)山本工作所

**岡田 裕二氏**

1978(昭和53)年卒

#### 1. はじめに

昨年12月に九大グリーンクラブのOB会会長である中原氏(昭和50年卒九州電力)から「リレー随想」への寄稿を打診され、自分の記憶に残っていることを好きに書けば良いという言葉

に背中を押され、引き受けた次第です。人生を振り返りながら、節目で再会した同窓の仲間との「縁」を中心に書いてみたいと思います。

## 2. 大学時代 L1-8組とグリーンクラブ

私にとって入学直後に会ったL1-8組の仲間と過ごした時間、そして2年生で入部したグリーンクラブでの3年間はとても大切なものです。

当時のL1-8組は法学部の苗字が「や」～「わ」で始まる学生と経済学部の「あ」～「か」までの50人弱でした。入学直後私は、高校時代やっていたサッカーの同好会をL1-8組で立ち上げました。同時に野球好きがいて野球同好会も立ち上がり一緒にトレーニングをしました。この仲間たちと以来47年間に亘る付き合いが始まりました。

忘れられない思い出をひとつ披露します。サッカー同好会に警固中学出身者がいて、ある日彼の提案で同中学校の校庭を借りようということになり、夕方行ってみると校庭には誰もいません。大丈夫だ、よしやろうと勝手にボールを蹴り始めました。5分も経たないうちに校舎から2～3人の先生方が血相を変えて飛び出してきて「君たちは何をやっている！」と一喝されました。その時男性教師が言ったことが今でも忘れられません「君たち九大生は将来が期待されている若者だ。その君たちがこんなことをして良いのか」と。その日は皆落ち込んで帰りました。その後ずっとあの時言われたことが私自身の戒めとなっています。

サッカーは1年で諦め、2年生の春にL1-8組の伊藤氏(富士通)大神氏(日本電気)梶谷氏(レナウン)が所属していたグリーンクラブ(以下GC)に入部しました。主に九州の山に登ることを目的として昭和48年にスタートしたクラブです。GCについては中尾氏(昭和50年卒九州松下電器)中野氏(同太陽神戸銀行)中原氏と同期の古賀氏(日本生命)が本会報に寄稿し既に詳しく書いていただいたので詳細は省きますが、以後46年間のGC仲間との付き合いは私の貴重な財産です。毎年OB会を開催しています。

GC仲間との山行で最も記憶に残っているのが宮崎県の尾鈴山(おすずやま)です。昭和52年の8月、最後の夏休みに同県の名峰大崩山(おおくえやま)に6～7人で登った後、古賀氏と二人だけで高鍋市まで足を伸ばし尾鈴山に挑戦しました。1週間近く続いた遠征で疲れが蓄積した中での強行軍、頂上に着いた頃は疲労困憊、何と下りで道を間違えてしまったのです。1時間近く山中を彷徨った挙句、迷っ



福智山山頂にてグリーンクラブの同級生と  
中央が筆者(昭和52年)

た時の鉄則「上に登れば頂上に着く」で何とか山頂に戻ることが出来ました。しかし既に陽は傾き麓のキャンプ場でもう一泊する羽目になりました。食料も無く僅かに残っていたお菓子を食べていた私たちに、福岡から来たという男性が同情して食料を分けてくれました。とても有り難く涙が出そうな夜だったことを今でも鮮明に覚えています。

## 3. 卒業後 2つの会社

昭和53年3月卒業後、今に至るまで私は2つの会社で仕事をしてきました。ひとつは最初に就職した福岡銀行、その後八幡にある銀行の取引先(株)山本工作所で今まで約43年間の社会人人生を過ごしてきました。

福岡銀行では28年間勤務し11か所で仕事をしました。丁度バブル期の前後で日本経済が大きく変動する最中、福岡だけではなく東京や大阪そして海外で貴重な経験をさせて頂きました。

最も記憶に残っている場所をひとつだけ挙げると、平成元年から4年までのニューヨーク勤務です。何といっても30歳代半ばとまだ若く、私の銀行員人生の中で最も躍動感を感じた3年8か月でした。

現地赴任する飛行機で偶然出会ったのが同じL1-8組にいた井出氏(富士銀行)です。今と違って治安がとても悪かった時代、彼には米国での生活について指導していただきました。同じ富士銀行におられた國武氏(49年卒)にも出会うことが出来ました。同氏には米国企業に対する与信業務についてご指導いただきました。まだ右も左も分からない状況で、同窓のお二人に出会えたことは私にとって幸いでした。ニューヨーク時代の貴重な経験をひとつ披露します。1991年平成3年に勃発した「湾岸戦争」です。当時私はニュージャージー州の田舎町に

住んでいましたが、この戦争の最中住宅の庭の木に結ばれた「黄色いリボン」を見つけました。その家の家族或いは親族の誰かがまさに戦いに従事していて、その方が無事で早く帰ってきて欲しいという願いを込めたりボンでした。これを見たときに私は、自分は平和な日本に住んでいたが、今住んでいるこの国は「戦争」に直面しているのだとあらためて思い知り、全身に鳥肌が立つような感覚に襲われました。人生で初めて「平和」の大切さと有り難さを体で感じたことを鮮明に覚えています。

その後時は流れて51歳の春、北九州市八幡東区にある(株)山本工作所に出向し翌年転籍しました。同社は日本製鉄(株)の旧八幡製鉄所のお膝元で鉄鋼製品、主にドラム缶を製作する会社で、年間百万本以上を生産する西日本では有数のドラム缶メーカーです。私の仕事は技術と営業以外のすべて。幸いだったのは社のオーナー経営者二人がとても鷹揚な方で、「鉄」の業界は素人の私に会社経営の大切な部分を任せてくれたことです。転籍直後にリーマンショックが起こる等本当に苦労しましたが、仕事と地域活動を通じて北九州市特に八幡の個性豊かで多才な方々と交流することで、50歳を過ぎて自分を成長させることが出来たと思っています。

八幡の地域活動として今も続けているのがロータリークラブ(以下RC)です。八幡RCの会員としてももう13年になりますが、最後の奉公のつもりで今年7月から始まる新年度の幹事を引き受けました。後で分かったのですが新年度の地区ガバナーは貫同窓会長でした。これもひとつの縁と考え、しっかりと地域奉仕活動で恩返しをしたいと思っています。

#### 4. 2つのL1-8

この会社で約15年間で過ぎましたが、この間の同窓生との再会を2つ披露します。ひとつは「北九州L1-8組会」です。市内に昭和54年卒の安藤氏(住友セメント)池田氏(住友銀行)柴田さん(旧姓上田、北九州市役所)と3人のL1-8組出身者がいて、同期の石丸氏(TOTO)と私に集まりましょうと声をかけてくれました。平成23年8月にスタートしたこの会は、その後私の同期の進さん(旧姓浅野、九州国際大学)と9組の川野氏(住友生命)も加わり、これまでなんと21回を数えています。この間平成29年4月には伊都キャンパスの「新亭々舎」で久しぶりにあの懐かしい水炊きの味を堪能しました。翌年4月には熊本復興支援ということで私と同期9組の作間さん(旧姓小屋敷、小屋敷税理士事務所)を訪ねて熊本まで遠征、温泉に浸かった後皆で

盛り上がりました。このメンバーとの出会いで北九州勤務がさらに充実したものになりました。

もう一つは関東に住む同期L1-8組の仲間達との再会です。平成27年6月の福岡支部総会で同期の垣永氏(松下電器産業)と再会し、同氏から「六本松七四会」という名称で定期的集まっているという話を聞きました。メンバーは法学部の吉松氏(トヨタ自動車)渡辺氏(安田信託銀行)そして前述の石丸氏と大神氏、沖原氏(東芝)織田氏(小松製作所)小野崎氏(東芝)です。翌年には東京で彼らと数十年ぶりの再会を果たし、その後定期的にゴルフと懇親会の交流を続けています。年に1~2回は関東の仲間が福岡に来て垣永氏と私が迎え撃つというゴルフ東西対抗戦も行っています。彼らと一緒にいると数十年の空白が無かったように感じ、気持ちは学生時代に戻っています。

#### 5. これから

私は2年前に山本工作所の非常勤役員となり、サラリーマン生活をセミリタイアしたつもりでしたが、先に書いた通りRCの幹事を引き受けました。そしてもうひとつ、福岡銀行からお話を頂き昨年秋から八幡西区の折尾愛真短期大学の非常勤講師をしています。これも不思議なご縁で、昨年11月の同窓会報に寄稿された市川氏(昭和49年卒)の後を受けて「財政」と「金融」を教えています。先輩の足元にも及ばない、およそ学問とはかけ離れた内容の講義をしていますが、最近では学生たちとの交流を楽しみに感じています。60歳代後半でまた新境地を開拓できればと考えています。

### リレー随想

## 篠栗町に生まれて



篠栗町町長

三浦 正氏

1979(昭和54)年卒

#### ○篠栗の町

九州、そしてアジアの玄関口である福岡市に隣接する糟屋郡(7町で構成)は福岡市のベッドタウンとして、人口減少時代にあっても今なお人口増加を経験している日本のなかでも数少ない地域です。その糟屋郡最東部に位置するのが、私が生まれ育った町、そして現在町長を務める篠栗



南蔵院の霊場開き

町（ささぐりまち）です。

大学同窓生の皆様でも、福岡市の東に位置する糟屋郡篠栗町をご存知の方はあまりいらっしゃらないかもしれません。町域39k㎡のうち約7割を森林と山間地域が占める山里です。九州大学農学部演習林もあるのですよ。

福岡市に隣接する他の町のように顕著な人口増加はみられないものの、三方を山々に囲まれる雄大な自然環境でありながら、博多と筑豊を結ぶJR篠栗線が東西に通っていることから博多駅まで快速で18分と交通利便性も良く、近年注目されている町です。

また、篠栗四国八十八ヶ所のお遍路の町として栄え、総本寺の南蔵院には世界一のブロンズ涅槃像があり、国内外から年間約100万人の参拝者が訪れます（現在は新型コロナの影響で来訪者は大きく減少していますが）。町内にすべての札所があることから、健脚の持ち主なら2泊3日で回ることができる手軽さもあり、そのご利益を求めて巡礼される姿も見られます。

### ○私の原体験

この町に生まれ育った私が、父に誘われて一緒に歩いて遍路をしたのは、九州大学文学部に落ちた春でした。緑映える新緑の景色を楽しみつつ、それぞれの札所や茶屋でお接待を受けながら清々しい気持ちになったことを今では懐かしく思い出します。とはいえ人生中々上手くはいかないもの。又次の年も文学部を落ちてしまい、失意のなか再びお遍路へ。

その甲斐あってか翌年は無事に経済学部に入學でき、お礼の気持ちで3回目のお遍路に至ります。この3年連続のお遍路で私はすっかり自分の生まれ育った町、篠栗の虜になってしまったような気がします。

### ○町長になって

そうした青春時代の原体験があったのでしょうか。昭和54年に大学を卒業したあと福岡銀行に26年間勤めましたが、平成16年、50歳のときにご縁があって乞われ、一念発起して町長に立候補し、初当選して町のために働くこととなりました。

まず取り組んだのが、恵まれた自然環境を生かした「森林セラピー基地篠栗」の発信。私自身も森林セラピストとなって仲間と活動しながら、町内外の人に篠栗の山の素晴らしさ、五感を開いて心を鎮めることの気持ちよさなどを伝え始めました。それから16年余り、現在5期目になりましたが、白髪頭になりつつも、情熱を絶やすことなく、住民の福祉の向上とまちづくりに取り組んでいます。

### ○「篠栗町まち・ひと・しごと創生総合戦略」

私が町長になったころから、国の政策も大きく変化しました。顕著となった人口減少社会を見据えた、初の人口維持政策としての「まち・ひと・しごと創生総合戦略」の名のもとに、それぞれの自治体が個性を打ち出して、その存続をかけた取り組みが求められる時代となりました。

それまでの地方交付税頼みのいわゆる三割自治体であったわが町も、変わらなければならないの思いで、「篠栗町まち・ひと・しごと創生総合戦略」の実践に取り組み、その中心事業として5年前から新たな食品系工業団地開発に着手し、令和5年3月の進出企業の操業開始を目指して事業を進めているところです。

福岡市にある辛子明太子製造業販売会社が、本社・工場移転を発表、北九州市に本社のある珈琲焙煎販売業者は東アジアに誇れる焙煎工場を建設し、自社ブランドのコーヒー豆を広めたいと、その意気込みを表明しています。また、関東に本社のある、高級料亭はじめ飲食店からスーパーまで鮪の刺身を供給する冷凍マグロの加工会社、久山町に本社のある全



篠栗北地区産業団地造成地全景



国規模の出汁製造販売会社など、変化にとんだ工場の進出が決定しています。

21世紀にふさわしい、産業ロボットを駆使した新しい食品系工業団地が新たな篠栗町の核として機能し始め、周りを囲む山々の緑に馴染んで人が訪れる、人を呼び込む町に変化すると信じています。そのために、令和5年4月の操業開始に合わせて、工場見学を始め、物販にも力を入れて新しい食の発信基地にしよう。誰もが立ち寄って楽しいひとときを過ごしてもらうことのできるよう賑やかさを売り物にしよう。そして、周辺より高台にある気持ちの良さや周辺の緑、イロハ紅葉の森に加え、楽しみを倍加するようなアートの丘を目指した、“あらたなまちづくり”を考えています。

### ○新型コロナウイルス感染対策とワクチン接種

まちづくりを計画通りに進めるためには、同じベクトルの方向を見据えた、信頼できる職員間の存在は絶対です。そうした意味でも、職員との思いの共有、目的意識の共有は大変重要です。

こうしたなか、昨年早々から、図らずも全世界で新型コロナ禍という未曾有の脅威を経験することになってしまいました。令和2年度は、例年行ってきた事業や地域行事は悉く中止とし、全町民とともに感染拡大防止に向けて辛抱し、頑張った1年でした。

それでもコロナは退散しません。今年度はワクチン接種を滞りなく行うことを第一の目標に、職員一丸となって取り組んでいるところです。そうしたなか、コロナが落ち着いた後のアフターコロナの日常についても考えなければなりません。町民の皆さんが安心できる日常を過ごすことできるように、職員間のミーティングで知恵を出し合っています。町民の皆さんへ今後の日常生活のあり方についてのしっかりした発信が、信頼関係の持続を可能にするのではないのでしょうか。

### ○これからの篠栗町

私も経験してわかったことですが、多くの先輩方がお話しされているように、まちづくりは、長期ビジョンを持って、軸のブレない政策をきめ細かに積み重ねていったなかに、初めて花開くものだとつくづく感じています。全てが私のときに完結するものでもなく、また新たな芽が出て、次の世代に花が開く。その積み重ねこそ持続可能なまちづくりの具現化ではなからうかと感じます。私は情熱を持ち続けて頑張りますが、賞味期限が切れる前に次の世代にバトンタッチをして、篠栗町の更なる発展を楽しみたいと思っています。(令和3年2月28日)

## リレー随想

# ミャンマーで起業3年目です



クオリー株式会社 代表取締役

竹之下 一也氏

2012(平成24)年卒

### ○はじめに

皆様、はじめまして。2012年3月に経済・経営学科を卒業した竹之下一也と申します。鹿児島出身の30歳です。会社員を経て日本とミャンマーで起業しました。今回は私の紹介とミャンマーでの起業に至った経緯を書かせて頂きます。

### ○起業思考の起点～大学時代

起業思考になったのは20歳頃です。元々は、両親が公務員だったので、私も公務員か大企業もしくは九州の地場大手に就職することを希望していました。考え方が変わったきっかけは複数ありますが、①ゼミの指導教官であった山本健児先生に無理やり行かされた日本財団主催の「日本再発見塾」という地域おこしイベントで長崎県波佐見町の地域おこしに学生幹事として参加し、地域の産業に興味を持ったこと(山本先生、当初は色々と言って申し訳ございませんでした。)②就活の頃、JALの破綻のニュースを見て、「大企業に入ること=安泰」ではないと思ったこと③当時、就活シーンで「グローバル人材でないと生き残れない」とよく耳にし、その真偽を確かめるためにアメリカ西海岸にバックパッカー旅行した際に、起業思考のある同年代の人に出会い、世界の広さを知り、グローバルな起業に興味を持ったことなどです。それらの要素が重なって、「自分で事業を興したい」と考えるようになりました。

### ○4年半の会社員経験

起業思考となったものの、ビジネスのやり方もわからなかったですし、資金もなかったので、「社会人経験をしながら起業資金を貯金しよう」と考えました。就活は、雑誌「東洋経済」を買って、その特集「今後伸びそうな会社ランキング」の上位を受けました。その中でも、当時ランキング3位だった久光製薬が佐賀県鳥栖市本社で(東京と2本社制ですが)地元九州に貢献している有力企業ということで志望し、運よく入社できました。

久光は配属希望を3つ提出できたのですが、「せっかく全国転勤の会社に入ったのに、自分で決めるの

はもったいない」と思い、「どこでも行きます」とだけ書いて提出しました。新人研修の際に北から順番に配属発表されたのですが、すぐに名前を呼ばれ、北海道釧路郡への配属となりました。

釧路では変わった経験ができました。管轄支店が札幌支店で、300km離れていたもので、会社に与えられた借上社宅が自宅兼事務所でした。所属チームは、西に120kmの帯広に2人、釧路に私、東に120kmの根室の担当が1人、の4名チームでした。近くに誰もいないので、仕事は全部自分1人でやる必要がありました。上司や先輩には電話とメールで質問をし、営業目標達成のための行動管理は自分自身でやりました。セルフコントロール能力はかなり鍛えられたと思います。今思うと、2012年からリモートワークをしていたので時代を先取りしていました。

とはいえ、新卒1人きりで働くことは大変で色々思うことがありまして、1年半で株式会社リクルートに転職しました。20代のうちに起業するために、退職後に起業する人が多くいるリクルートに入ってそのノウハウを得ようと考えました。当たり前ですが、リクルートに入ったところで起業のノウハウを教えてくれる訳ではないのですが、私はSUUMOという不動産情報ポータルサイトの営業で埼玉県、千葉県地の場の不動産会社を担当することになり、何百人もの不動産会社の社長、経営者に会うことができました。気に入って頂いた社長たちから会社経営についても色々な訓示を頂き、3年働いて退職し、不動産会社向けの広告・集客のコンサルティングをする会社を立ち上げました。

#### ○ミャンマーとの出会いと再出発

勢よく会社を立ち上げたのはいいですが、収入も不安定だったので、ベンチャー企業にも籍を置き、そこから給料をもらって生計を立てていました。その会社がミャンマーに支店を持つ会社でした。

リクルートの人材部門にいた友人から、その会社が「若くて馬力のある営業責任者」を探していると話を聞き、概要を聞いているうちに「ミャンマー」という響きに無性に惹かれました。大学時代、前述したアメリカ西海岸へのバックパッカー旅行を皮切りに海外にハマり、東南アジアにもよく旅行をしていて、人々の陽気さ・明るさと「今日より明日が良くなる」ことを信じて疑わない雰囲気が好きで、将来は東南

アジアでも仕事をしてみたいという思いを持っていたのですが、久光製薬やリクルートで猛烈に働くうちにそのことを忘れていました。このタイミングで東南アジアと仕事に関わるチャンスがきたのも何かの縁だと思い、ミャンマーに飛び込んでみることにしました。

営業部長として採用されましたが、ミャンマー事業が面白くて自分の会社そっちのけでそのベンチャーの経営にも首を突っ込むようになっていきました。ミャンマーは、国土が日本の約1.8倍、推定人口5,400万人、平均年齢約28歳の国です。最大都市のヤンゴンに推定人口840万人（どの市域まで入れるかにより変わります）で若い人が多く、活気に溢れています。私は日本で顧客対応をして1～2ヶ月に一度、ミャンマーに出張して現地支店の管理をする生活を送っていたのですが、行く度に新しいビルやショッピングセンターができ、街の様子が変わっていきます。行った当初は街を走るのはボロボロの中古車だけだったのに徐々に新車や綺麗な車も増えていったり、過半数が伝統衣装を着て出勤していた社員たちのTシャツとジーンズの比率が急激に高くなったりと変化のスピードがとにかく早くて毎日が驚きの連続でした。ミャンマー人は日本人と相性がいいと言われていますが、自己主張をあまりしないタイプの人が多く、周りの空気を読む人が多いのは似ているところかな、と思います。日本と同じかそれ以上に上下関係に厳しいため、管理者としてはやりやすい面もあると思います。ただ、面子を重んじる人が多いので、他の人の前で叱られたりするとすぐに辞めてしまうことなどあり、失敗を繰り返しながら、会社を大きくするために身を粉にして働きました。

すっかりミャンマーに夢中になってしまい、四六



クオリー創業時

時中このベンチャー会社のために働いた結果、6年間赤字続きだったその会社を半年で黒字に反転させる成果を出して半年後にはCOO（最高執行責任者）となりました。

「もう、自分の会社は畳んで、このベンチャーを伸ばそう」と考えていた矢先、そのベンチャーの社長が会社を売却しました。私がいないとその会社は機能しない状態だったので、ミャンマー側の70人の社員たちを守るために、私も買収後の親会社に所属することにしました。その後、PMI（Post Merger Integration）を責任者として遂行し、約半年で完了しました。私がいなくなっても運営できる状態になったのでその会社から退きました。

PMIの際には、親会社の意向でリストラも行いました。私が矢面に立ったのですが、思い入れのあった社員たちや事業を切ることに納得がいかず、自分の会社の主事業をミャンマー事業に変更して、再出発することにしました。

#### ○現在の事業

私が経営する会社はクオリー株式会社とQualy Myanmar Co., Ltd.です。メイン事業はIT事業で、日本の会社のホームページ制作やゲームデバッグ、スマホアプリやウェブシステム、ソフトウェアの品質検証業務、AI関連のBPO業務（教師データの作成やアノテーションなど）をやっています。ミャンマーの社員たちに日本語とITの技術を教え、ミャンマーのコストメリットを活かした安価で高品質な対応ができることを売りにしています。

また、ミャンマーで日本語学校を運営しています。日本の地方の会社や工場などにミャンマー人が就職するための人材育成と紹介、ミャンマー人採用の仕組み作りやミャンマー人のマネジメント手法のコンサルティングをさせて頂いております。

その他、日系企業のミャンマー進出支援やミャンマーでの商品マーケティング代行、不動産業などやっています。コロナ禍以前は年間100日くらいミャンマー、残りは日本（ベースは埼玉です）で行ったりきたりしていましたが、新型コロナウイルスの影響で2020年3月からはずっと埼玉にいます。

#### ○2021年2月ミャンマー情勢を受けて

（2021年3月2日追記）

日本でも報道されている通り、2021年2月1日にミャンマー国軍が政権を掌握しました。現地時間の深夜1時から朝9時まで毎日インターネットが遮断されるのでその時間は連絡が取れなくなります。夜間の外出禁止（夜8時から早朝4時まで、違反する

と逮捕される）や日中も国軍や警察が市中で銃を発砲したりして危険な状態でもあり、現地従業員のことが心配でなりません。

もちろん私の事業にも大きく影響があります。コロナ禍でもオンライン授業をなんとか続けていた日本語学校の売上はゼロになりました。幸い、ITの仕事はコロナ禍でリモートワーク体制を構築していたので業務はできていますが、デモへの参加で社員が突然休んだりすることもあり、日本側でバックアップしながら顧客に迷惑をかけないようにしています。まさか、起業して3年経って休日返上で徹夜も挟みながら仕事をする事になるとは思っていなかった。「うまくはいかないものだな」と思いながらも1日1日をなんとか乗り切っています。

私がミャンマーに対してできることは、海外投資が減る中、諦めないで、雇用の場を確保し続けることだと思っているので、ミャンマーで、一般市民がインターネットを自由に使える、好きな時間に外出できて、何気ない日常を送ることができる、明日に希望が持てる日々に1日も早く戻ることを願いながら、この難局を乗り越えてみせます。

#### ○最後に

今回はリレー随想という貴重なお話を頂きありがとうございました。執筆後、掲載前にミャンマーの政情が変わり、追記もさせて頂きました。この難局を乗り越え、ミャンマー事業を成功させ、日本・ミャンマー両国の架け橋となれるよう精進して参りますので、応援いただけますと幸いです。ミャンマービジネスについては日本で一番詳しい部類だと自負していますのでミャンマー関連のことで知りたいことがありましたらぜひお声がけください。

### リレー随想

## Palookas



株式会社いい生活  
藤本 優臣氏  
2021(令和3)年卒

私は大学生生活の4年間をアメリカンフットボール部Palookasで過ごしました。Palookasとは「弱い者たち」という意味で、スポーツよりも勉強を頑張ってきた弱い者たちが這い上がる、という意味が込められていま

す。嘘でも勉強を頑張った4年間でしたとは言えませんが、必死にアメフトに取り組んだ4年間でした。結果として、4年生のシーズンで、7年ぶりの九州リーグ制覇を掴み取りました。下手くそな文章ですが、私がアメフト部で過ごした苦しくも、楽しい、熱くて、かっこいい最高の4年間について書かせていただきます。

私が高校2年生の時、アイシールド21という漫画と出会い、アメフトというスポーツに興味をもち、大学生になったらアメフトをしてみたいなという漠然とした思いを胸に九州大学に入学しました。そして、入学式の前日にアメフト部の新歓が開催されていることを知った私は、恐る恐る参加してみることにしました。そこには想像の何倍もムキムキで、想像の何倍も本気でアメフトというスポーツに本気で取り組む先輩たちがいました。その先輩たちを見たとき、こんなにかっこいい人たちが世の中にはいるのかと衝撃を受けたのを今でも覚えています。そんなかっこいい先輩たちの「お前たちに九州制覇という最高の景色を見せてやる」という言葉を信じ、アメフト部に入部しました。

アメフト部に入部してからは、勉強よりも筋トレ、食トレ、練習、ミーティングといった一日のほとんどをアメフトに費やす生活を過ごしました。そんな努力の甲斐もあり、1年生の頃からスタメンとして試合に起用されるようになりました。しかし、先輩に期待されていたような活躍もできず、チームとしても、大一番で勝ちきれず3位という悔しいシーズンでした。優勝がなかった試合での敗戦後、大雨の中、「優勝させてやれなくて申し訳ない」と言いながら悔しさを噛み殺して明るく振る舞う4年生の先輩たちのあの姿が今でも夢に出てきます。

そんな悔しい経験から、2年生のシーズンでは、1年生のとき以上の努力をしました。そんな自分に対して、常に新しい課題や目標を提示し、自分の成長をともに喜び、かわいがってくれた先輩方の甲斐もあって、チームの中心選手として活躍する選手になりました。結果として、個人としては個人賞を受賞したものの、チームとしては九州制覇まであと一歩で負けてしまい2位という結果に終わりました。

3年生になり、副将にも任命され、今までのように自分のことだけではなく、チーム全体として成長できるように、1学年上の先輩方とあらゆることに取り組みました。この1年間で、個人としても多くの経験をさせてもらい、チームとしても大きく成長しました。しかしながら、惜しくも3位という順位



でシーズンを終えることになりました。

そして、あっという間に最上級生である4年生になっていました。3年間の努力や実績が認められ、4年目のシーズンに主将として臨むことになりました。

4年目のシーズンが始動してから3ヶ月が経過した3月28日（土）、2週間後に新チームとしての初めての試合が予定されているタイミングで、嫌なニュースが舞い込んできます。「福岡県内でのコロナ感染拡大により、今週末の不要不急の外出禁止」。当然のように練習は急遽中止となりました。翌週からは普通に練習も再開できるだろうという思いとは裏腹に、感染者はどんどん増え続け、緊急事態宣言が発令されました。全体で集まることができない中、Web上で筋トレや、個人個人で走り込みをするなど、いろんな工夫を凝らし、いつ練習が始まってもいいように準備を進めました。しかしながら、緊急事態宣言解除後も学校側から部活動再開の許可がおりず、4年生最後の試合に出場できなくなる他部活も増え、自分たちもラストシーズンに参加できないのではないかという不安を感じる中、ラストシーズン開幕の2ヶ月前となる9月、ついに部活動を再開することができるようになりました。

他大学のほとんどは6月や7月から練習を再開している状態であったため、焦りを感じていました。しかし、活動自粛期間で積み重ねた努力を信じ、再び全員で集まって練習できる喜びを噛み締め、短い期間ではあったもののチーム一丸となって練習に取り組みました。

11月3日待ちに待ったPalookasの初戦がやってきました。約1年ぶりの試合ということもあり、チームは今までにない緊張感に包まれていました。しかし、自分の頼もしい同期たちの活躍によりチームはいい流れに乗ることができ、31-8という結果で勝利することができました。次節11月15日も前節の勢いそのままに、前半から大きくリードし、35-0で勝利を飾ることができました。

そして、運命の決勝戦11月29日。相手は6連覇中の王者、西南学院大学。序盤から試合を有利に進め

るも、点を取り切れず9-3で前半を折り返します。後半開始後、点数に動きはなく、4Q,3分53秒、待望の追加点により16-3と相手を突き放します。そこから完全に流れを掴んだPalookasは30-3という大差で優勝を決めました。

試合後、7年ぶりの優勝を掴んだ自分のもとには、Palookasを応援してくださるOBやサポーターの方から、多くのお祝いのメッセージを頂きました。改めてこのチームが多くの人から愛され、応援されているんだということを実感しました。そんな多くの人に愛される最高のチームで、最高の仲間たちと、

九州制覇という最高の結果で締めくくることができたことは、一生忘れられない経験になるでしょう。

これからもPalookasは続いていきます。これからも九州制覇を目指して、多くの後輩たちが大学生活の4年間を捧げていきます。この記事を読んで少しでも多くの方がPalookasを応援してくださるといいなと思います。

いいことも、嫌なことも、多くの経験を提供し、自分を大きく成長させてくれたPalookasと、ここまで読んでくださった皆様への感謝の言葉で締めたいと思います。ありがとうございました。



2020年度秋季リーグ 於：平和台陸上競技場

## 人物往来～退任

### 九州大学を退任するにあたって



経済学研究院教授

**磯谷 明德氏**

[専門分野] 制度経済学・進化経済学

本会報に研究院長退任のご挨拶を書かせていただいたのは、2019年3月末のことでした。それから2年後の本年3月末日をもって定年退職を迎えました。名誉教授

の推薦を研究院長である岩田先生からご連絡を受けた際に、人事係に作成いただいた勤続年数調書に37年とあり、37年もの間、この「渡世」にあったことに改めて感慨深いものを感じた次第です。

私は幸いにも20代後半に茨城大学に職を得て、茨城大には7年半在籍し、その後九州大学に転任して29年半を過ごしました。1991年10月に九州大学経済学部へ転任した訳ですが、その転任においては現在のような公募ではなく、名指しでの採用候補という形でした。もしその当時、今のような完全公募制であったならば、私のようなさほどの研究業績も持っ

ていなかった者はおそらく九州大学に採用されることはなかったらと思います。転任のお誘いの際には、逢坂充先生がわざわざ東京までお出でくださり、大学院での指導教員の故高須賀義博先生の陪席のもと逢坂先生のお話しをうかがいました。

その当時、私は優れた研究環境のある場があればと思っていましたし、高須賀先生からの「大学院生を教えることができる大学に行くべきだ」との強い勧めもあって、逢坂先生のお誘いをありがたくお受けすることにしました。結果、九州大学にお世話になることになり、大学院でも講義を持つことになるのですが、当初の私の研究レベルでは大学院生を「教える」などというのには遠く及ばず、むしろ「大学院生とともに学ぶ」というものでした。自分の研究に不足しているもの、自分が読みたいと思うものを取り上げて、大学院生とともに勉強するというのが九大での最初の10年間くらいであったと思います。

しかし、これは私にとってはとても有益な10年間でした。異端派のマクロ経済動学、特にポストケインズ派の分配と成長の理論を網羅的に習得することができましたし、90年代の新たな制度研究や制度分析の創成期的な熱気に触れ、そこから多様な発想を得ることができました。したがって、この最初の10年間は九大での研究教育生活の土台を作ってくれた期間であったと思います。

しかし、私は「開放型」の研究スタイルが好みであったため、その後には大変な苦勞をすることになりました。新しい分野や知見に触れると、それらを網羅的に知りたくなる。そのために関連する諸論文や著作を片っ端から読み漁ることになります。ややもすると研究の対象領域が拡散してしまい、いざ自分の研究を単著にまとめ上げようという段になった時、著書を貫く一本の筋を何にするかという点で悩みに悩んだことが思い出されます。なぜこのような研究スタイルを志向するようになったかは、一橋大大学院進学時に読み、折りに触れて読み返すことになる杉本栄一『近代経済学の解明（上）（下）』（岩波文庫）からの影響が大きかったからだろうと思います。杉本経済学の精髓は、異なる学派に属する者が共通の場で切磋琢磨すること（せつさたくま）にあり、それがなければ学問の進歩はないというものです。私もそうしたところに少しでも近づきたい、そうした精神を持って研究を進めたいと常々思ってきました。ただし、本当にそうした精神でこれまで研究ができてきたかについてははなはだ心許ないのですが、この「開放型」の研究スタイルを採ってきたがために、昨年

退職された大下丈平先生と同様に「多くの人との出会い」に恵まれました。

学外では、山田鋭夫氏、塩沢由典氏、八木紀一郎氏。海外では、ロベール・ボワイエ、サミュエル・ポウルズ。かれらはすでに70歳台後半、80歳を超えようとしています、今でも学問の最前線で活躍しています。研究生活のロールモデルとしてきた研究者たちですし、日本人の三氏からはこれまで多くの学恩を受けてきました。そして、長年の共同研究者である植村博恭横浜国立大学教授、海老塚明元大阪市立大学教授。学内では、何よりも故森本芳樹先生。研究姿勢の厳格さと卓越した語学力、幅広い教養と学識の深さに驚愕しました（きょうがく）。西村明先生からは最近、英文著作とその日本語版を恵贈いただき、退職後も新しい学問的挑戦を続けておられる姿には驚嘆させられます。そして14年間同僚でもあった荒川章義立教大学教授。自然科学（生物学と古典物理学）と哲学の歴史の中から近代経済学の考え方が生成されてきたことを綿密に示した彼の独創的な研究には目を見開かせられました。また、2015年から19年までの研究院長時に、心許ない私を支えてくれたのは岩田健治先生と大石桂一先生との二人の副研究院長でしたし、4年の間、計8名の部門長の先生方にもチームとして万全の下支えをしていただきました。すべての先生方のお名前を挙げることはできませんが、快適で優れた研究教育環境を与えていただいた経済学研究院の皆さまに心より感謝を申し上げたいと思います。

ところで、冒頭で37年間の「渡世」と記したのは、女優高峰秀子の『わたしの渡世日記（上）（下）』（新潮文庫）を思い出したからです。この書物の解説で沢木耕太郎は、彼女の文章の特徴は「その底に貫かれている人生を肯定する意志の強さ」にあると書いています。そして「間違いなく高峰秀子にも苦しみや悲しみがあつたろう。だが、その苦しみや悲しみが人生のすべてではなかった。……いい仕事をする仲間にも恵まれたし、鮮烈な人と出会うこともできた。そのうえ心やさしい人と結ばれることもできた。それでどうして人生を肯定しないでいられるだろう」とも書いています。私も、研究者としての人生を肯定できるよう、もう少しの間、このアカデミズムの「渡世」でもがいてみようと思います。

最後になりますが、同窓会の皆様には大変お世話になりました。何も知らない私に多くのことをお教えいただきました。本当にありがとうございました。

## 九大での12年間を振り返って



経済学研究院教授

**平松 拓氏**

〔専門分野〕 ファイナンシャル・  
マネジメント

2009年4月の着任からほぼ12年経ち退任を迎えるにあたって改めてご挨拶の機会をいただきましたが、着任時に一体どのようなことを書いたか記憶に残っていません。よって着任時の抱負が如何に的外れであったか、或いは決意が如何に守られなかったかの検証はご容赦いただきたいと思います。

民間企業で約30年間勤務した後、産業マネジメント専攻（QBS）に「実務家教員」として着任しましたが、大学教員への転身については前職でも事例が多く、そうした人から話を聞く機会も多くありました。それでも国立大学への転身は限られ、社会人対象のビジネス・スクールは初のケースだったと思います。そうした点で不安が無くもありませんでしたが、住むのは半世紀振りになります。福岡は我が出生地、九州がルーツでもあることから、この地で働けることの期待が上回っていました。

前年度末の3月31日の夕刻に福岡空港に降り立ち、雪交じりの冷たい雨が降る夜、夕食の店を探して西中洲を徘徊したこと、翌4月1日には人生で初めて花粉症を自覚したことなど苦難のスタートでしたが、今振り返れば九大で働くことができたお陰で多くの幸運に恵まれました。まず、第一に非常に意識の高い多くの九州人と出会えたことです。QBSの学生の中にも、例えば2度の受験失敗にも全くめげず、3度目で合格するや最優秀学生賞に狙いを定め、その強い意志を貫徹して実際に表彰された学生など印象に残る修了生が多くいます。皆私より年下ですが、尊敬できることに年齢はそれ程関係ありません。

アジアとの交流という面でも収穫がありました。前職では海外勤務経験の関係もあってアジアとの関わりは薄い方でしたが、アジアの提携校との学生交流のための引率や交換留学生の招聘調整などQBS生の国際交流活動サポートは、私自身の得るところも多かったと思います。そうした一環で、従来受入交換留学生数名に配分されていた日本学生支援機構（Jasso）の奨学金割当が制度変更に伴い廃されるという危機があり、表面In-boundでありながら実質社会人学生のOut-bound留学の代替というQBS交換留

学プログラムのユニークな点を理解してもらい、逆にプログラムとしてJassoで採択してもらえてことで受入留学生数の倍増に繋がりました。これはQBS設立時の優れたプログラム設計の賜物ですが、規模拡大のきっかけ作りができたのは良い思い出です。

ビジネス・スクールの授業ではファイナンシャル・マネジメントとマネジメント・コントロールの2科目を担当し、教科書としてそれぞれR.C. Higginsの”Analysis for Financial Management”とR.N. Anthony等の”Management Control Systems”を用いました。どちらも米国では定番の教科書でしたが、その内容は使い始め時点においては日本企業における財務経営や雇用システムの実態とのギャップは大きく、説明の仕方に工夫を要しました。漸く最近になって企業価値経営とかジョブ型雇用といったことをわが国でも耳にするようになり、日本の実態が教科書に追いついて来たと思います。

マネジメント・コントロールの授業は英語で行う選択必修科目でしたが、本来の専門は財務で、しかも英語ということで授業の準備には時間が掛かりました。それでも多くの交換留学生が受講してくれ、教室で交換留学生とQBS生の交流を実感できたことから、その甲斐は十分にあったと思います。

運営面では、着任がQBS設置後の垂直上昇期から安定飛行への転換期に当たっていたという認識でいますが、設置直後には潤沢であった資金もほぼ枯渇し、また、当地でのビジネス・スクールの認知度もさほどでなかったことから、専攻長時代には財政難や出願者低迷などで苦労も味わいました。しかし、先生方の努力によりそのまま失速することなく、今では安定飛行が実感できるのは力強い限りです。コロナ禍の下で遠隔授業やハイブリッド授業等の企画・準備のために若手の先生方が積極的に貢献されるのを目にして、2段目の噴射も近いのではと楽しみにしています。

話がどうしても専攻中心になってしまいましたが、他専攻の先生方とも楽しい思い出を作らせて頂きましたし、事務の方々に支えて頂いたお蔭で何とか勤め上げることができたと思います。改めまして皆様に厚く御礼申し上げます。OECDの諸指標で下から数える方が早くなってしまった日本の経済・社会ですが、それだけに大学等教育機関の役割は増々重要になっていると思います。これからは外野席から、QBSをそして九大経済を応援して参りたいと思います。

## 九州大学経済学部同窓会歴代会長

- 初代 田中 定氏 (昭和50年10月4日～)(3期8年)  
 第2代 森下 弘氏 (昭和58年2月4日～)(1期3年)  
 第3代 岡野 正實氏 (昭和61年10月24日～)(2期6年)  
 第4代 谷川 大介氏 (平成4年10月9日～)(1期1年)  
 第5代 渡邊 彦士氏 (平成5年7月7日～)(1期3年)  
 第6代 福岡 道生氏 (平成8年10月11日～)(1期3年)  
 第7代 吉田 清治氏 (平成12年2月10日～)(1期2年)  
 第8代 森山 靖章氏 (平成14年5月31日～)(1期3年)  
 第9代 平山 良明氏 (平成17年7月7日～)(1期3年)  
 第10代 池田 弘一氏 (平成20年7月7日～)(2期6年)  
 第11代 貫 正義氏 (平成26年7月7日～)

## 同窓会からのお願い

同窓会会費の納入をお願い致します。

会費は、終身会費(45,000円)と普通会費(3年間分4,500円)になっております。

終身会費は一括払いと分割払いとがあります。ご都合のつくときにご協力よろしくお願い致します。

- |       |      |                             |
|-------|------|-----------------------------|
| ①終身会費 | 一括   | 45,000円                     |
| ②     | 3分割  | 15,000円×3回(15年間で納入完了)       |
| ③     | 6分割  | 7,500円×6回(3年間で納入完了)         |
| ④普通会費 | 3年間分 | 4,500円ずつ(11回・49,500円の納入で完了) |

◎平成18年(2006年)3月末日までに旧同窓会規定の終身会費を既に納入頂いております皆様は、そのまま新同窓会規約の終身会員に移行しております。

◎従来の普通会員として今まで振り込まれた合計金額と、49,500円との差額を、今後何回かの分割払い、または一括払いで払い込まれた場合も、終身会員に移行となります。

◎終身会費を分割払いにされます方は、半年毎に3回又は6回続けてお振り込み頂きますようお願い致します。

◎会費納入や住所変更等のデータは、令和3年3月31日現在で集計しました。

住所など身の事情に変更が生じましたら、すみやかに下記同窓会事務局までご連絡ください。

### 御礼とお願い

同窓生の方からご寄付を頂きました。誠にありがとうございました。

頂いたご寄付は経済学部同窓会の運営資金の一部となりますので、今後共ぜひ皆さまのご協力の程お願い申し上げます。なお、寄付と協賛広告のお申込み、お問い合わせは下記、経済学部同窓会事務局までご連絡をお願い致します。

寄付者ご芳名：橋本純夫様(昭和47年卒)



九州大学経済学部同窓会事務局

(開室：平日の月・火・木・金 10時～17時)

〒819-0395 福岡市西区元岡744 九州大学経済学部内

TEL 092-802-5561/FAX 092-802-5560/E-mail: dosokai@econ.kyushu-u.ac.jp

経済学部同窓会ホームページ <http://koyukai.kyushu-u.ac.jp/alumni/4>